

2 P カラーの短編置き場

2Pカラー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スランプ脱却を狙うリハビリだったり、文章書く練習だったり、頭に湧いてきた何かをとりあえず形にしてみようとしたり

そんな感じで後先考えずに書いてみた諸々をブツこんどく場所。

基本、続きとか出てこない一話完結

タグはそのうち追加されていくことになるかと

警告タグとか気にする方はご注意ください

目次

P4ネタ	1
ヒカ碁ネタ	15
ISネタ	25
ランスネタ	45
ハイスクールD×Dネタ	52
ワンピースネタ	62

P4 ネタ

目が覚めたら目の前に私がいました。

何を言ってるのかわからねーと思うが（ry

いやー、このネタって便利なんですねえ。素数を数えるのよりもずっと冷静になれました。

さて、冷静にもなれたところで私の身に何が起きたのか振り返ってみましょうか。オカルトな出来事には慣れたと思っていきましたが、さすがに心の準備なしに巻き込まれ即対処できるとは思えません。こんな状況に追い込まれた原因の一端でも掴めれば対処法の一つくらい浮かびそうなんです。

私、狭間和馬、十六歳。高校一年生をやらしていただいています。中学までは東京の月光館学園というところに通っていたんですが、卒業と共に母方の実家のある八十稲羽に戻ってまいりました。ちなみに両親はいません。父親は蒸発、母親は私が四歳の頃に……。つと、まあつまらない話ですね、やめましょ。

月光館学園の高等部に進学しても良かったんですがね、学園に出資してるグループのご令嬢にも気を使っていただけで奨学金なんかのお話も貰えてましたし。しかし戻ってきたらやっただけですよねえ。私のことを娘を誑かした男の血とか言ってる祖父とも向き合わないやなあなんて、血迷ったこと考えてしまいました。

で、戻ってきたら八十神高校ってところに入学したんですが、入学早々街で猟奇殺人なんか起っちゃいました。死体をテレビアンテナに吊り下げるだの電柱に引っかけるだの。背筋が寒くなりますよねえ、ホント。戻ってきたことに早くも後悔ですよ。巖戸台に帰りたくなくなっちゃいました。

でもまあ男として一度決めたことを反故にするのもカッコ悪いかなあ、可愛げのないチビスケに根性ナシと笑われるかなあなんて考えながら、こっちで高校卒業くらいまでは頑張ろうと思ってたんです。

そしたら何故かまあ、人殺しの現場に通りがかっっちゃいました。いや、未遂だったんですけどね、私が止めたので。別に事件をどうこう

しようと思ってたわけでもないんですが。ようやく高校生になっただけのガキがうろちよろしても警察の皆様の邪魔になるだけでしょうとも思っていました。

深夜の散歩、やめた方がいいんじゃないですか？ 幸いといっているのか補導されたこととかはないんですが。

いえね、別に悪ぶって真夜中に街を闊歩してるわけじゃないんですよ。なんていうか、癖にでもなってるんじゃないかな。二年前まで肉体活動のピークが深夜零時になるようにしてたもので。駆けたり跳んだりしてたものですから。それを引きずってるんですかね、どうも深夜にじっとしてるのが落ち着かなくて。

でもまあ私の悪癖も今回は良い方向に働いたんじゃないでしょうかね。一人の命を救えたわけですし。

いつものように深夜に家を抜け出して、さびれた商店街の自販機で胡椒博士を買い、適当に歩きながらそれを飲む。そんな日課の最中に事件現場に行くわしちやいまして。なんか……鈍器？ 形状とか描写するのも面倒ですしボールのような物で良いですか、それをオッサン相手に振りかぶってる学生くらいの男が居まして、あらま危ないと蹴り飛ばしちやったんですよ。そしたらなんとまあ殺そうとしてたとか。

テレビでも流れたんですよ？ お手柄高校生って感じで。目線は入れてもらいましたけどね。

なんだかその殺人未遂犯は二件の猟奇殺人も自分のやったことだと告白してるとかで。連続猟奇殺人、三件目を未然に防いだのは地元で学生でした！みたいな特集組まれちゃって。インタビューまでされちゃいました。

そんでまあ学校でもちよつとしたヒーローみたいな扱いで。りせちー？でしたっけ、アイドルやってたって子にも話しかけられちゃいました。テレビとか見ないんで実はよく知らないんですけどね。

それで、どうしたんですっけ？ ……えーつと、ちよつと嫌味のマイルドになった祖父と初めてと言っていていくらいのまったりした食事をして……、呼び鈴が鳴って……。

「うーん。わかりませんねえ。なんでこんな状況になってるんでしよう?。」

「ようやく口を開いたかと思えばそれですか、『私』」

「おや? 目の前の『私』が口を開きました。別に意思持たぬ人形とか思ってたわけでもないんですが普通に喋れるとは少し意外です。私の思索中も一言も挟まず静観していましたし、口がきけないのかと思っていましたよ。」

「というか自分の声を他人の口から聞かすのも不思議な感覚ですねえ。」

「『私』……ですか。つまり貴方も私だと?」

「はい。私は貴方、貴方は私。『私』もよく知っていますでしょう?」

「知っているかどうかはともかく、懐かしいフレーズであることは間違いないですね。」

「ということはコレは夢……ってわけでは無いですよねえ。夢と現実の区別くらいはつきます」

「ええ。夢なんかじゃありませんよ。現実かと問われれば首を傾げてしまいますが」

「それは確かに。この風景は現実味があまりありません」

「周囲を見渡すとまるでコロッセオのような空間が広がっています。ずいぶんと霧が濃いですが、間違いはないでしょう。」

「私と『私』を中心に広がる円形の空間。その周囲には壁があり、その向こう側にはおそらく観客席が。」

「現実味は確かにありません。しかし懐かしいのでは?」

「……ええ。あまりいい思い出ではないですが。なにせホラ、私、蜂の巣にされちゃいましたし」

「いやあ、あの時の彼女たちは容赦がなかった。まあ人のこと言えななんですけど。私も彼女たちをスクラップにするつもりでしたし。一緒に戦った先輩も、いつもはひょうきんなお調子者って感じなのにあの時はホント怖かったですし。」

「……うん、思い出したくないですね。」

「しかしコレが夢でないならば、何故『私』は出て来てるんです? し

かも私の姿をとって」

湧き出てくる思い出から逃げたってわけじゃないんですよ？ そろそろ疑問を解消したいなあと思っただけで。

そう、疑問なんです。目の前の『私』が私の考えている通りの存在だとするのなら、それは私の中にいるはずなんです。仮に私の意思なしに私の外に出てきたのだとしても、私の姿をしているはずなどないのです。

『私』が、もし本当に『私のペルソナ』なのだとしたら。

「理由の一つに、ココが私の出やすい場所であるということもありますが、もつとも大きな理由としては、我慢ならなかった、というものでしょうかね」

そう言った瞬間、『私』の線の様に細まった目が薄く開きました。

そこから見えた瞳の色は、私のものとは似ても似つかぬ金色。それまではストンと納得していた目の前の『私』。私という理解が一気にかき消されてしまったかのような、そんな気がしました。

しかしまあ、この程度では吞まれてはあげませんよ。一応それなりの修羅場はくぐって来てますしね、私も。

「はて？ 我慢ならなかったとは？ 私、貴方に見限られるようなこととしちやいましたかね？」

「貴方も私なら理解しているでしょう？ 自分に対しての苛立ちも、もちろんあります。しかしそれ以上に我慢がならないのはこの世界の方です」

「世界……、と来ましたか。いやはや私とは思えないほどにスケールの大きい」

「とぼける必要はないでしょう。私は貴方なんです。貴方の苛立ちも私は当然理解しています。なにせ貴方は私なんですから」

『私』が呆れるように大袈裟に肩を竦めた瞬間、左の方でなにかを叩くような音が響きました。それと同時に「ハザマ！」という声も。

『私』から意識を逸らさず少し振り返ってみました。霧が濃いですね、良く見えません。コロッセオの観客席になにやら人影らしきものがあるような気がします。

しかし『私』には人影がはつきりと見えるのか、目を細めながら「早いですねえ。随分と早い」と、そんなことを呟いています。

そして、「しかたがありません。もう少しお喋りに興じて居たくもありませんが本題に入りましょう」と、心底残念そうに頭を振ると、再び私の目を真っ直ぐ見つめ直し、話を続けました。

「殺人。連続殺人。連続猟奇殺人。酷い話だと思いませんか？ 思うでしょう？ 貴方も私なのだから」

特別捜査隊。八十稲羽で二件の猟奇殺人の真相を追い求め、マヨナカテレビに映りテレビの中に落とされた者の救助を行っている高校生を中心としたグループである。正確には『特別捜査隊』とは自称ではないのだが。

そんな彼らにとってこの数日は、情報に振り回される、まさしく急転直下の連続だった。

地元の高校生による諸岡金四郎殺害未遂。逮捕された高校生の二件の猟奇殺人を実行したとの自供。そして諸岡殺しを食い止めた立役者の失踪。

自分たちの与り知らぬところでの事件解決に、気が抜けたかのような瞬間を狙い澄ましでもしたかのような誘拐に、一同は真犯人の存在を確信するとともに怒りを抱き、同時に誘拐を防げなかったことを、防ごうと動くことすら出来なかったことを悔いた。

彼らが動くのは早かった。雨の日まで猶予があるだとか、そんな悠長なことは以前からも大して考慮していなかった集団である。夏休み中だということもあったのだろうが、即座にテレビに落とされた『ハザマ』という少年の情報を集め、新たに仲間となった久慈川りせのナビのもと居場所を突き止めた。

『巖戸台分寮』と、そう書かれたプレートが掛けられた古びた洋館。これまでメルヘンチックな城や異様な空気の漂うサウナ、淫靡な雰囲気劇場と、テレビの中のセットのようなダンジョンをクリアしてきた面々にとっては逆に新鮮さを覚えてしまうほど、その洋館は『普通』

だった。クマが言うには他のどこよりも『安定』しているとか。

門を潜り抜けるとそこは想像とは違い寮の廊下のような場所で、一同は階段を見つけ下へ下へと進んでいくことになる。その、シャドウささいなければ現実のどこかにあると言われても信じてしまえそうな洋館の中を。

八つ目の階段を降りると、そこにはラウンジが広がっていた。階段から顔を出したすぐ横にはキッチンと大きめのテーブルがあり、寮生たちが食事をとる姿が容易に想像できる。本来ならエントランスの役目を果たすのであろう立派な扉の横にはカウンターがあり、掲示板には二年ほど前のカレンダーと予定表が。小さめのブラウン管テレビはレトロな趣を醸し出し、それが見える位置にはシックなソファアが並べられている。

生活感がありすぎるダンジョン、それが特捜隊の面々の脳裏に浮かんだ感想だった。ただ一つ、ラウンジの中心に開いた穴と、そこにある扉の異様な存在感以外は。

一同は四六商店で買い込んだアイテムで傷を癒し気力を回復させると、扉を開け放った。

そして一様に一瞬言葉を失うことになる。それまでの、現実においてような洋館然とした風景とは一線を画すコロッセオを目にして。

最初に我に返ったのは特捜隊のリーダーでもある鳴上悠。悠はコロッセオの中心で向かい合う二人のハザマを目にして駆け出していた。

今まで誘拐された本人とシャドウの対立を見てきた悠である。現状の危険性をよく理解していた。

今、ハザマと彼のシャドウは何をしているのか。まだ会話すらしていないのか。シャドウの揺さぶりは始まっているのか。それとももう既にハザマはシャドウを否定してしまっているのか。もし否定してしまったのだとしたら、いつシャドウが暴走しハザマ本人に攻撃を加えるかもわからない。シャドウの攻撃にさらされることはペルソナに覚醒し、装備を整え、戦闘の経験を積んできた悠たち特捜隊の面々にしても命がけになるのだ。何の準備も心構えすらも出来てい

ない一般人に耐えられるはずもない。せめてすぐにフォローできる位置まで近づかなくては。そう考えたのは悠だけではなく、他の特捜隊メンバーもすぐにハザマに向かって駆け出していた。

しかし彼らがハザマのもとまで駆け寄ることはできなかった。闘技場の外縁部に、まるで闘技場と観客席を区切るかのように、不可視の壁が存在していたがために。

「な、なんなんすかコレ!? これじゃアイツんトコまで行けねえっすよ!」

「俺に聞かれてもわかるわけねえだろ! ってかマジでなんなんだコレ? 今まではこんなもんなかっただろおが! なんで今回に限って俺らが近づけねえようになってんだよ!」

ガンガンと不可視の壁を殴りながら完二が毒づき、陽介が焦ったように答えた。

「全力で蹴ってもビクともしないんだけど! もー、こうなったらペルソナでー!」

「うん。私も協力するよ、千枝。なんとかしてこの壁を壊さない」と

千枝と雪子がペルソナ召喚のために一旦壁から距離をとるが、

「だ、駄目クマー! この見えない壁、全員で攻撃しても壊れそうになりクマよー!」

「うん。クマの言ってた『安定してる』ってのがスゴイよく分かる。たぶん力づくで壊すのは無理だと思う」

感知力に優れたクマとりせからストップがかかった。

万事休す、か? いや、ここがコロッセオなら闘技場に入る方法も必ずあるはずだ。観客が闘技場に入るのを防ぐためにこの壁があるのだとしたら、闘士用の入場門のような場所さえ見つけければ。

しかし間に合うのか。いや、間に合わせなくちゃいけないんだ。新たな犠牲者なんてまっぴら御免なのだから。焦る思考をなんとか冷静にさせようと悠は気力をふり絞る。

そして、

「ハザマー!」

せめて自分たちがそちらに行くまで時間を稼げるよう、悠はなにか

言うべきことを探す。ソイツの言うことを否定するな？ ソイツの言葉に取り合うな？ 無理だ。陽介も千枝も、雪子も完二もりせも、シャドウを否定すればどうなるかをずっと見続けてきたクマでさえも無理だった。シャドウは最も見たくない自分を的確に見せてくる。もつとも触れられたくない部分を正確に突いてくる。そんなシャドウを受け入れることは、誰かに言われたからとてそう易々と出来ることではないのだ。

ふと、こちらを向いたハザマと目があつた気がした。自分の呼んだ声に反応したのか、しかしわずかに首を傾げると、『金色の瞳のハザマ』、シャドウへと向き直ってしまう。

霧のせいか。眼鏡をかけていないハザマにはこちらが見えていなかったのかと舌打ちしそうになるが、しかし悠は気づいた。

「まだ猶予はあるみたいだ」

「ど、どういうことっすか、先輩？」

「ハザマの顔だが、表情に陰りがあるようには見えない。シャドウに否定したい自分を見せられていたのなら、」

「キレるなりへこむなりしてるだろってわけか。たしかに今すぐヤベエってわけでもなさそうだな。でもよ相棒、だからってノンビリさせてもらってるってわけでもないんだろ？」

「ああ。なんとかしてこの壁の向こう側に行かないと。ここがコロッセオを再現してるんだとしたら、闘技場へ入る入口も必ずあるはず」それを探そう、そう続けるつもりという言葉は途中で区切っていた。コロッセオの中心、シャドウの口から出た言葉に違和感を感じたがために。

「殺人。連続殺人。連続猟奇殺人。酷い話だと思いませんか？ 思うでしょう？ 貴方も私なのだから」

違和感。そう違和感だ。シャドウは否定したい自分を見せつける。にもかかわらずハザマのシャドウはごく当たり前の倫理観を口にしてる。

「人が人を殺し、まるでその成果を誇示するかのように衆目にさらす。それを見た街の人間は、恐怖や嫌悪、罪悪に対する義憤を抱きつつも、

話題として盛り上がる。被害者に対する噂を流し、死者に対し中傷するものまで出る始末。まったくもって酷い話です。そう思ったでしょう? 『私』も」

その言葉をハザマに否定させたいのだろうか。いや、それはないだろう。ハザマはモロキンを助けている。モロキンの殺害未遂で逮捕された少年は、確かに『殺人未遂』の罪で捕まったのだ。殴ろうとしただけの首を絞めようとしたのならおそらくは『暴行未遂』止まり。『殺人未遂』とまでされるにはそれ相応の理由があるはず。たとえば計画性、たとえば精神的な異常、そして、たとえば凶器の有無。警察に『コイツなら制止されなければ殺していただろう』と思わせるほどの何かを持った人間に、一人で立ち向かえた勇氣と正義観を持った人間が、果たして当たり前の倫理観を否定するのだろうか?

その疑問は悠だけではなく仲間たちも同様に持ったようで、おずおずと千枝が声を上げた。

「ね、ねえ、あれってハザマ君のシャドウなんだよね? ってことはさ、ハザマ君がお前なんか俺じゃないって言うわけだから、殺人とかは酷い話だと思わないっていう、……こと?」

「違うよ千枝。シャドウの言ってることが隠しておきたい本心なんだから、ホントは酷い話だって思ってるけど表では良い話って……、アレ?」

「いやいやいや、里中も天城もそりやねえだろ。どこのダークヒーローだよ。本心でも殺人は酷いことと思ってるのは当然、表でだって悪ぶったりしてねえだろ。なんせモロキン助けてんだぜ? あのモロキンを。八十高生でモロキン助けるために凶器持った危ないヤローに立ち向かってく奴が何人いると思うよ? りせちーや天城が襲われてるってんならともかく、あのモロキンだぜ? モロキン」

「ええいつ、モロキンモロキンうるっさいってんのよ! でもじゃあなんでシャドウはあんなこと言うわけ? 自分を否定させなきゃ暴走できないじゃん」

「いや、そりやわかんねえけど。……暴走する気が無い、とか?」
「なによそれ。暴走する気ないシャドウとか、それもうペルソナじゃ

んか」

ペルソナ、なのか？ 確かにテレビの中に入れられたからといって必ずシャドウの暴走が起きるわけではない。他ならぬ悠自身がその証拠。シャドウと向き合うことも、シャドウを受け入れることもなく、始めから悠の中にはイザナギというペルソナが存在していた。しかしあの『金色の瞳のハザマ』がペルソナなのだとしたら、なぜそれはハザマの姿をしているのか。疑問が次々と増え続けていく。

しかし混乱する特捜隊を余所に、『金色の瞳のハザマ』の話は続いていく。

「酷い話です。人の死は決してエンターテイメントなどではない。死者は生者を楽しませるための玩具などではない。死者の身に起きた不幸は悲しんであげるべきなのです。死者と共に過ごせなくなったら自分たちを憐れんであげるべきなのです。せめて安らかな眠りをと、祈ってあげるべきなんです。にもかかわらず、メディアはまるで事件をセンサーシヨナルなイベントの様に騒ぎ立て、世間は根も葉もない噂で盛り上がる。酷い話だ」

いちいち最もな言葉だ。それだけに『金色の瞳のハザマ』の意図が見えない。本当に暴走する気が無いのではないかとすら思えてくる。

ふと、悠には陽介が気になった。『金色の瞳のハザマ』の言葉に一番心を揺り動かされているのは、小西先輩という思い人を失った陽介だろうから。

しかし陽介の方へと向き直すことはなかった。続いて放たれた『金色の瞳のハザマ』、いや、『ハザマのシャドウ』の言葉に意識を持っていかれて。

「思うはずだ。貴方は私なのだから。こんな下らない人間どもに生きる意味など存在しないと。どいつもこいつも死んでしまえばいいと。思ったのでしょうか？ 知っていますよ。私も貴方なのだから」

それまで疑問を口にしていた特捜隊の面々も押し黙っていた。やはりアレはハザマのシャドウ。そしてコレこそが、ハザマの認めたがらない本心ということか。

急がなくてはならないのは悠にも分かっていた。一刻も早く闘技

場へと侵入するための入り口を探さなくてはならない。しかし悠たちの目は、二人のハザマから離せなかった。離せなくなっていた。

「どいつもこいつも反吐が出ます。少し苛立っただけで『死ねよ』、少し辛いことがあっただけで『死にたい』。生きるということを馬鹿にするにもほどがある。生きられなかった人を侮辱するにもほどがある」

シャドウの瞳がハザマを射抜く。ハザマはいったいどんな思いでそれを受け止めているのか。

「思っただけです。貴方は私なのだから。分かりますよ。私は貴方なのだから。何故『あの人』が死んで、あんな連中が生きているんだ。あんな下らない連中の命を何十億集めたとしても、『あの人』一人の命の方が尚重いはずなのに。何故『あの人』はあんな連中のために、こんな世界のために命を賭けたのか。そう、思いますでしょうか？」

「私は——」

「『私』にしてもそうです」

何かを言いかけたハザマを遮り、なおもシャドウのお喋りは続いた。

「『あの人』は言ってくれました。『私』はいらない人間なんかじゃないと。生まれてきたのが間違いな人間なんかいるはずがないと。普段は無表情で、何に關しても『どうでもいい』と切って捨てるというのに、フフツ、笑みを浮かべて『私』の頭なんか撫でてくれちゃって。嬉しかったですねえ。生まれて初めて自分のことを肯定してもらえた気分でした。でも、やっぱり『私』にも、『あの人』の命と釣り合うだけの価値なんかありませんでした」

「……」

「そもそも望まれて生まれたわけでもないですしねえ、『私』という奴は。母親が『私』という新たな命が胎の中にいること知ったことも、現実の見ていない十七の若人二人、都会に夢見る田舎者の駆け落ちのための切っ掛けくらいにしか思われてませんでしたし。そしてまあ私が生まれるまでの半年で、父親になるはずの男は現実に打ちのめされアツサリ蒸発。母親になるはずだった女もなんでこんなことに

なったのとは後悔するばかり。お前がいるせいで実家に帰ることも出来やしないと暴力を振るわれたこともありましたがね。そんなに『私』が邪魔なら捨ててしまえばよかったですよ。子を捨てたことで得るであろう罪悪感を恐れて、その結果わが子に暴力をふるうなんて、本末転倒でしょうに」

シャドウの口から朗々と紡がれるハザマの半生には、悠たちも絶句せざるを得なかった。

「そんな、実の親にすら生まれたことを疎まれた『私』の命が、『あの人』の命と釣り合うはずがないというのに。どいつもこいつも死んでしまえ、そんなことを考える『私』と、皆が生きていける未来を願った『あの人』、どちらにより価値があるかなんて、どちらが生きるべきだったかなんて、そんなこと分かりきつていてというのに。ねえ？」

そこでシャドウは話すのをやめた。もう十分に見たくない自分を見せつけた、後は否定されるのを待つのみ、そう言いたげに笑みを深めてハザマの反応を待っている。

しかしハザマの表情に相変わらず翳りはなかった。それどころかシャドウの言葉を興味深そうに聞いているほど。悠にはそれがどこか、空恐ろしかった。

だが、翳りのなかった表情とは裏腹に、ハザマの出した声は、彼の印象とは真逆の、ドスの利いた低いものだった。

「で、言いたいことはそれで終いか？ わざわざそんなことをほざく為に出てきたってわけかテメエ？」

見ればハザマの線のようにだった目はうつすらと開き、口元には寧猛な笑みが浮かんでいた。

「ええ、その通り。もしかして怒っちゃいました？」

「ハッ。なんだそんなことも分かんねえのかよ。散々俺がテメエのテメエは俺だのほざいてやがったじゃねえか」

これは、ハザマがシャドウを否定するのか？ そう思い、不可視の壁に阻まれ何もできないというのに悠は身構えていた。

しかし、

「分かんדרろ？ なんせ俺はテメエだ。なら分かるはずだろおが、俺

がブチギレてるなんてのはよお！」

み、認めた？ 仲間たちも唾然としているのを悠は感じていた。

「わざわざ見たくもねえ部分ばかり曝け出しやがってよお、クソが！ ああ、そうさ！ 全部テメエのほざいた通りだよ！ どいつもこいつも死に晒せ、ゴミ以下の分際で『あの人』のやったことを無駄にすんじゃねえ、そう常々思ってるよ」

「……そして、そう思ってしまう自分が許せない、と？」

「……ああ。ぶっ殺してやりてえくらいむかついてるぜ。なんせ『あの人』のやったことを踏みにじってるみてえなもんだからな。こんなことを考えちまうこと自体がよ、クソ！」

「そうですか。ぶっ殺してやりたいくらいに。ハハハッ。やはり出てきて正解でしたね」

心底楽しそうにシャドウは肩を揺らすと、どこに隠し持っていたのか大ぶりのバタフライナイフを二本取り出した。

特捜隊の面々が息をのんだのもつかの間、シャドウはそのうち一本をハザマへと投げ渡した。

「コイツは……。チツ、そういうことかよ」

「ええ、そういうことです。ホラ、『私』のぶっ殺したがっていた私はここにいますよ。私も『私』の中に半分くらいは残っているのが分かるでしょう？ この空間に感謝ですね。私が全て出なくてもこんな体を持てたのは間違いなく私の出やすいココのおかげなんですから」

まさか戦うつもりかよ、そう陽介が声を上げる。シャドウを受け入れたのにどうなつてんだ、と。

それは至極当然の声。しかし悠には陽介の様に声を上げることができなかった。

ハザマとシャドウ、二人の身から立ち上る青い蝶の群れのような力の波動を目にしたがために。

バタフライナイフを構え、顔には獯猛な笑みを浮かべ、

「わざわざ憂さ晴らしのサンドバックに立候補しやがったんだ。簡単に潰れんじゃねえぞテメエ」

「フッフ。私も少しくらいは楽しませてもらいたいですねえ」

二人は同時に叫んだ。己の半身であり、己自身であるペルソナの
を。

「来い！ ウロボロス！」

ヒカ碁ネタ

死んだ↑まあ分かる。人間誰でも一度は死ぬもんだ。実際自分が死んだことを死んだ人間が自覚できんのかって疑問は残るが。

死んだと思ったら生まれ変わってた↑微妙に分からん。そりや死んだ後どうなるかなんて生きてるうちには分からないんだから、もしかしたらそういうこともあんのかも知れんが。まあ小説なんかの出だしてみたいな感じでならアリなんじゃねえかなとは思う。

死んで生まれ変わってまた死んだらさらに生まれ変わってた↑もう分からん。輪廻転生的にはあつてるのかもしれないけど、さすがにくどい。つてか輪廻なら記憶とか残らんしね。つてか実際あつたら中身百歳越えの乳幼児とか出てくるじゃん？ キモくね？

で、だ。なんでいきなりこんな話をしてんのかと言うと、他でもない俺が死んで生まれ変わってさらに死んで生まれ変わった奴だからだ。そう、キモいやつだからだ。

しかも時間的にちよっとおかしい。死んで生まれ変わったつてんなら死んだ時より後の時代に生まれそうなんだったのに、何故か過去。

ビルとか建てるのブームになってんの？つて感じの時代（確か平成。微妙に記憶に自信ないんだけど）↓髷してねえとかダツセーつて笑われる時代（今でいう江戸時代。生まれたのが文政だったかな）↓またビルがによきによきしてる時代（かなり平成だよこれ）

つまり一度過去に戻ってからまた現代へって感じか？ また死んだら江戸時代に戻されんのか？ もういい加減あの世なりなんなりに送ってほしいんだけども。

まあ生まれちゃったもんは仕方あるめえ。今度は俺としてきつちり生きて、んでもっぺん死ぬべつてなもんで受け入れてはいるんだがね。

うん。微妙に引つ掛かりを覚える言葉だったかもしれないね。俺として生きるつて辺り。

というのもだ。前回、江戸時代での人生だったんだが、俺として生きてたわけじゃあなかったんだよね。

なんだか平安のころに死んだかいう幽霊に憑りつかれちゃってさ、碁が打てないとか死んでも死にきれませぬうみたいなこと言うもんだから、俺の代わりに打たせてやってたんよ。

俺も碁はよくやってたんだけども、それは多分手慰みみたいなものだったんだろうね。あんま執着なかったし。というのも江戸時代とか娯楽とかないんよ。いや無いわけじゃないんだけど、現代人の楽しめる娯楽が少ないってのかね。テレビとかラジオとか無いし……なんか歌詞になりそうで怖いから後は想像してくれ。

だもんで数少ない俺の楽しめた娯楽である囲碁は結構やってたんだけど、したら碁盤に憑いてた幽霊にこつち来られちゃって。佐為って奴なんだけれども。

碁は好きだったけど別に情熱に燃えてたわけでもなかったしね。俺が佐為の思うままに打たせてやることで一人の幽霊が成仏してくれるってんなら、まあ協力してやってもいいかなあなんて思った次第で。

前世、今から見ると前々世か、その記憶があつたつてももデカかったのかもね。一度は人生やりきつたんだから、別に今回は俺としてじゃなくつてもいいかなあみたいなの？ 他人（人じゃなく幽霊だけど）に今回の人生はくれてやっちゃってもいいかあみたいなの？ 誰かのために生きてみんなのも二度目の人生の使い方としては十分上等かなあみたいなの？

まあそんなわけで佐為のやりたいようにやらせてやったんよ。結果を見ればやり過ぎさせちゃったわけなんだけどさ。

最初はへボな俺と佐為とで打ってたんだけど、齢九つだか十だかのころに丈和つてオッサンに弟子入りすることになって、初段二段とトントン拍子に。あれは佐為の力で出世してるみたいで気まずかったなあ。まあ佐為も満足してたしwin-winな関係だったんだけど。

したらまあ十四代目の本因坊跡目になってたり、オッサンの娘と祝

言挙げてたり、御城碁に出仕することになったり。碁打ちとしての出世ロード？ 邁進してるみたいになってたっけなあ。

俺はといえれば夜中に佐為とちよろつと打ったり、昼間に誰かと佐為とが打った局をあーでもないこーでもないと言いつたりするくらいいしかなかったんだだけだね。

でもまあそんな二度目の人生も終わりの時つてのは当然来るもんで、虎狼狸にやられちまったんだわ。虎狼痢だっけ？ コレラ？ まあなんかの流行り病だわな。病でぶっ倒れた連中の看病してたらうつされちゃったって感じで。言ってみりや自業自得みたいなもんだ。

佐為やら秀和やらにやあ止めとけつて言われてたんだけど、二度目の人生は誰かにくれてやるつもりだったし、後悔はしてないんよ。佐為はウザいくらいに泣いとつたし、ちよつと悪いことしたかなあくらいは思ってるけど。

で、まあ三度目に至る、つと。

あ、また一から生きる羽目になったんかって理解した後は思ったね。今回はどうすんべ、つて。

俺として生きてもういつペン死ぬ。そのことは、まあすぐに決まっただんだけど、どう生きるかってのが中々。

一度目はなるようになる感じで生きてた気がする。流れるままにっつていうのかね？ 周りと同じように小中高大と進学して、就職してきたところに適当に就職して。気の合う女と連れ合いになって、平凡な家庭を築いて。特別デカイ成功もなければ特別ヒドイ失敗もないつーかね。それなりに幸せだったんじゃないかと思う。二度目の人生を誰かにくれてやる気になる程度には満足できた人生だったわけだし。

二度目はウダウダ述べたように誰かのため、ぶつちやけほとんど佐為のために使ったような人生だわな。悔いも未練も別に無えし、佐為に含む所があるわけでも無いんだけども。

で、三度目はどうすつかなあになるわけだ。

一度目の様になるようになる感じで生きるつてのもどうかと思う。

嫌だとは言わんしつもらんとも思わんが、一度経験してることと似たような感じの人生をなぞるってのも、なんだかなあって感じだろ？

二度目の様に誰かのためにつてのも、なあ。佐為みてえなのが他にも居るってんなら話は別だが、そうでないなら何すりゃいいか分からんし。ボランティアに人生捧げる？　なあんか違うわなあ。大体食い扶持稼げんのかいつて疑問も出るし。

まあ人生の過ごし方なんてハナから決めるようなもんでもないかと、そのうち何かしら思いつくんじゃねえかと、そう思い直して適当に過ごすことにしたんだけどな。

四つだか五つだかんときにテレビでな、碁の中継がやってたのを見てな。どんな偶然か本因坊戦、つてなわけじゃなく、局の名前を冠した棋戦だったんだけど。

あー懐かしーみたいな感じでぼんやり見てたんだけど、そのうちアレ、コレ俺でもそこそこやれんじゃね？　佐為としか打ってなかったせいで自分が強いなんて思いは持ってなかったけど、テレビに映ってる三段四段くらいなら普通に勝てちゃうんじゃね？　みたいなことを思ってたな？

そしたらまあ、佐為じゃない俺としての碁を打ちたい衝動つてのかね。むくむくむつくりつてなもんよ。あー碁打ちてえなあつて。

とはいえいきなりプロ相手に一局打ってくれなんて言えるわけもない。なんせこちとら碁石の持ち方もおぼつかなくなってやがるんだ。まずは鏑落としてなつてもりでジイさん相手にちよこちよこ打つようになつたんだわ。

そしたらよ、まあ想像はつくかもしれんが小学生になるかならないかのガキがあつという間に何年も碁を、まあ遊びでだが、打つてたジイさんを上回る腕を手に入れたつてんだから、ジジ馬鹿てのか？　未来の名人じゃーみたいな感じでチャホヤされて。実際は過去の本因坊のガワでしかねえんだけどな。碁盤だの棋譜集だの買い与えられるようになってな。

碁石の持ち方にも大分慣れた。コミのことも知った。現代の定石もそこそこ理解した。ジイさんやその碁仲間も倒した。となりやあ

物足りなくなってくるわな。まあ碁を打ってるだけでも楽しいんだけどよ、やっぱ齒応えのある相手が欲しいっていうのか？　ずっと佐為相手に打ってたからか、格上の相手との対局が懐かしくなってきたんだわ。

まあまずはプロのことを調べるわな。なんせ一流の碁打ちが集まってるんだから。でもいきなりプロの世界に飛び込むってのもなんだかなあって思ってたな。あ、そう簡単に飛び込めんのかよってのは今は無しな？　問題は飛び込んだ後のことだし。

生活が碁一色になるってのは別に嫌じゃあない。二度目の人生もそんな感じだったが苦痛じゃなかったし、佐為ほどじゃあないにしても俺も碁が好きなんだろうしな。齒あ食いしばって碁打ちやってくるのも悪かあないと思ってる。

でも折角ガキでいられる時間だ。野球もサッカーもテレビゲームもやりてえわな。必死でプロ目指してる奴らからしてみりや業腹かもしれないけどよ、三十余年碁を打ってきた経験値持って強くてニューゲームやらかしてる反則野郎が、スポーツだのゲームだのやりてえことやった後でプロ目指すなんてほぎきやがったらよ。

でもまあやりてえようにやらしてもらおう、ならすぐプロ目指して弟子入りなり院生入りなりは止めとくかって考えたんよ。

でも強い奴とは打ちたい。御城碁で幻庵やら算知相手にやり合ってた佐為みてえな碁を俺も打ちたいってな気分はなくならなかったんだわな。

なんとかプロ相手にアマチュアでも打てる機会がねえもんかなって。碁のイベント？　それじゃあ指導碁されちまうだろ。互先でお願いしますつつつてもこっちはガキだ。適当に指導碁のつもりで打たれて、実力の分かるころにはハイ並んでる方と交代ねってなもんですよ。俺の打ちたい碁じゃあなくなるわな。

だから最低でも二局以上、理想は何度も同じプロと顔を合わせられる機会が欲しかった。そうすりゃ最初の一局はナメてかかられても、次の局からは本腰入れて貰えんだろ？　本腰入れるまでもねえと判断されても、きつちり俺の棋力を把握したうえで、まだプロとは地力

の差があると指導碁打たれるってんなら納得も出来るしな。

で、そんな時に見つけたのがタイトルも複数持つてる塔矢行洋経営の碁会所ってわけだ。聞けば塔矢門下のプロも結構顔を出すって言うじゃねえか。そりゃ行くわな。

本命はもちろん塔矢行洋だよ。まあ棋譜見た限りじゃ俺にやあ勝てそうにもない相手だったけども、名人と打てるってんなら打ちたいわな。あとは次点って言っちゃあ失礼だが緒方精次とかか？ 塔矢門下じや頭一つ飛び抜けてるしな。

まあいきなりプロとは打てなくても、プロ相手に指導されてる碁会所の常連ならウチのジイさんらよりは強いんだろうし、物は試しと行ってみたんだわ。少ねえ小遣い握りしめてよ。その時は小三だったかな？ 一人で電車に乗ってよ。健気なもんだわな。

でもまあ健気だからって運は味方してくれなかったみてえでな。塔矢行洋も緒方精次もいなかったんだわ。受付の姉ちゃんは、ここならプロと打てるって聞いたつつたら申し訳なさそうな顔してたっけなあ。今は居ないのゴメンねって缶ジュースおごってくれたわ。席料は負けちやあくれんかったけど。あのしつかり具合は花を、ああ秀策だったころの連れ合いが花ってたんだが、思い出したっけな。

つと、話がそれた。まあそんな訳でお目当てのプロはいなかったんだが、折角電車乗ってまで来たんだ、誰かと打ってから帰るかって対局相手を探してたんだが、その時に同い年くらいの奴が居てな。塔矢行洋の息子、アキラだ。まあその時は塔矢行洋の英才教育受けた息子だなんて、ちつとも気づかんかったが。

一人で棋譜並べしてたもんだから棋力は分からなかったしな。ただまあ石の持ち方は綺麗だったし、淀みなく石を並べていくもんだからそれなりに打てはするんだろって思ってた誘っちゃまったんだわ。一局打たねえかって。

まあ周りから囃し立てられたね。おいおいボウズ、そりゃ無茶つてもんよ、つてな感じで。まあ今となつちや納得できるんだけどな。塔矢行洋の息子と棋力も分からねえガキが打つてもきちんとした碁になるとは思えねえってオツサンどもの考えも。

でもそんな時はよ、ああコイツはジイさんたちにとっての俺みたいなもんなんかなあってな風に思ったんだわ。いろいろ教わって可愛がられているっていうの？ 天才じゃー将来の名人じゃーみたい扱われてんのかねって。

まあ囃し立てられてるアキラの方はそんな扱いにも慣れてんのか、どこ吹く風って感じで「いいよ、棋力はどれくらい？」って聞いてきた。

さすがにプロの三段四段くらいにや勝てそうだなって言えんわな。もし俺がそんなセリフを同年代のガキに言われたら吹き出してる自信があるし。

だもんで「それなりにやあ打てるはずだ。知り合いで碁の打てるジイさん相手にや負けなしだし」つつったわけだ。思い返すとかなり謙虚だったな俺。

でもまあ棋力を判断するのは無理だわな。ジイさんに勝てるって言われても、アキラにやそのジイさんがどんくらいの棋力なんか分かんねえわけだし。困った風な顔してたわ。

だからよ、とりあえず一局打ってからそつちで判断してくれって言おうと思ってたんだ。二局打とうぜって。で、二局目は好きに置石していいぜって。

だがあの野郎、「それじゃあ三子くらいかな」なんて言いながら黒を渡してきやがった。俺も大概上から目線だったが、アキラも大概だったぜ。

カッチーンきたね。中身は一度目二度目合わせりや一世紀は生きてるつてのに大人げねえとは思うけど、カッチーンきちまったもんは仕方ねえ。こちららガワでしかなかったとはいえ本因坊秀策じゃ、軽くヒネったるわ、世界の広さをこの機に覚ええと思つて。

んで「いらんわ。黒くれるってんなら貫つとくけど、コミも有りていいつての」つて。実際三子置いてプツツと倒してから「あれ？ 自信満々で三子置かせてたのにコレ？ ププー」とどっちがいいか微妙に迷ったけどな。

外野の囃し立てはデカくなったけどな。若先生相手に互先とは泣

いても知らねえぞ、だの。近所で負けなしだからって自信過剰になっちゃダメだつてことを教えて貰え、だの。完全アウエーだったわ。

まあやる気は上がったけどな。お前らのお気に入りのお坊ちゃん潰して黙らせたるわボケみたいな感じで。……思い返すとマジで大人げないな俺。ちよつとへこむわ。

で、アキラとの一局だ。ちよつとは予想してたんだが、いやさすがにこの年齢の子供ならないだろうとも思ってたんだが、あの野郎、指導碁のつもりで打ってきやがった。

うん。プチった。容赦なくプチつと潰した。大人げなさ、ここに極まれりって感じで中押し勝ち。アキラはしばらく呆然としてたわ。対局止めてこつち見に来てたギヤラリーもな。

で、そつからの俺がまた大人げない。呆然と碁盤を見てるアキラを余所に碁石片付けて、んで俺の黒とアキラの白を交換。言つてやりました。「それじゃあ三子くらいかな」って。

あれは楽しかったなあ。ニヤニヤすんのを止められなかったわ。ギヤラリーはビキビキすんのを止められてなかったけど。

んでアキラ君は俺と違って素直だったんだよなあ。普通に三子置いてはじめやがった。

うん。プチられた。容赦なくプチつと潰されたわ。もうね、ギヤラリー大爆笑。たぶん俺の耳とか真っ赤になつたと思うわ。俺版の耳赤の一局だったわ。いや、マジのアイツ強すぎ。アレに三子で勝つとかそうそう出来んわ。

でまあ、二局目が終わった後でアキラの方から「ゴメンね」と。「それだけ強かったらいきなり三子置いていいよなんて言われたら怒るよね」と。

恥じたねー。めっちゃ恥じた。なんか素直さが眩しくて見れない感じだったわ。

でもまあ俺の方も謝つてだな、なんかムキになつて悪かったみたいだな感じで。

で、互先で三局目。アキラもハナから全力だったんだが、まあさすがに勝つてな。で、軽く検討してその日はお開き。また来るから次も

打とうぜつつつて別れたわけだ。

んで、俺の週末の碁会所通いが始まった、と。

まあ大抵はアキラと打つんだが、たまにアキラから聞いたのか緒方が待ち構えるようになってたり、塔矢行洋と出くわしたときは打たせて貰ったりな。アキラと打つ時は相変わらずアウエーだけど緒方相手にするときには応援されるようになってな。北島のジジイだけは絶対こつちの味方にならないんだけど。

そういや研究会とかにも誘われたっけな。塔矢行洋に。師匠は誰かって聞かれた時に基礎的な所はジイさんから、後は秀策の棋譜から学んだって言ったせいかもしれない。さすがに実は秀策の中身から手解き受けた秀策のガワなんですとは言えんし。しかしまあ事実を知らない他人から見ればほとんど我流で塔矢行洋の息子を超えるほどまで成長したってことだからな。才能があるとみられたか、伸び代たっぷりにとられたか。きちんとした指導を受けさせてやりたいとも思われたんかね。

でもまあ今は伸び伸び打ちたいように打つのが楽しいんでみたいなこと言って断ったんだわ。ちよつと勿体なかったかもしれないけど仕方ない。なんせ研究会は夜遅くまでやるらしいし、となりやウチの親にも話さないわけにはいかん。碁打ちって職業のことも良く知らん両親に、プロの碁打ちが何人も参加する勉強会に小学生のくせに参加してきますつつつたところで理解されるとも思えんし。むしろ月謝を払わされるんじゃないか、なんか騙されてるんじゃないかと疑われるような気がしてな。下手すりや碁会所なんて行くんじゃないと言われてたかもな。

まあ今の所そんな碁会所禁止令みたいなことにはならず、俺は相変わらずちよこちよこ顔を出してるわけだ。

で、そんな習慣がもう二、三年にもなつて、大体の週末、アキラは誰とも打たずに俺を待つようになってたんだ。周りもそれを分かかっててな。棋譜並べして時間潰してるアキラを対局に誘ったりはしなくなつた。

なのに今日碁会所に顔出してみたら、珍しくアキラが既に誰かと対

局してるじゃねえか。見れば相手も俺らと同年代くらい。

ホント珍しいことは重なるもんだと碁盤を覗いてみれば、さらに珍しいことにアキラが劣勢。最近じゃ三十年弱佐為の指導を受けてきた俺でもヒヤリとするような手を打ってくるようになったあのアキラが、だ。

まじまじと碁を見れば指導碁になってるじゃねえかと。何モンだこのメツシユと思つたわ。

同時に棋風がなんか懐かしく思えて来てな。アレ、コレって？ つてなもんだ。

終局してメツシユはあー疲れたみたいな雰囲気できつきと帰ろうとしやがる。

思わず肩掴んじまつたわ。「今の碁は、佐為か？」って。

「んで、ハンバーガーくらいなら奢るから話しようぜつつって今に至る」

「長えよ！ ってか佐為がうるせえよ！ 二度目だったなんて聞いてなかったとか、虎次郎ばかりズルいとか、私も生まれ変わって碁石を持ちたいとか！ うるっせえんだよ！」

いや、知らんがな。

ISネタ

某月某日。なんら特筆すべきことのない、繰り返される日常のニコマになるはずのその時、ふと篠ノ之東は顔を上げた。

空中に投影されたディスプレイに高速で文字列を書き込んでいた東の手を止めさせたのは、彼女が認識できる数少ない人間の一人、織斑一夏が東の名を呼んだ声が聞こえたからだ。

もつとも一夏としては東に呼びかけたつもりなどなかっただろう。一夏が居るのは東の周囲を取り囲むように浮かぶディスプレイの一つの中なのだから。

東の妹である篠ノ之箒や親友である織斑千冬同様、一夏に貼り付けている監視機械から送られてきた映像である。

盗撮である。政府の監視下から逃亡し、今もなお各国の追手から逃げ続けている東の数少ない楽しみが、彼らの様子を覗き見ることであった。

取るに足らない有象無象をあしらうことへの苛立ちを癒す一服の清涼剤。薄暗い研究室で、妹や親友の生活する姿を見てニヘラと笑みを浮かべる様子は見る者に様々な感情を抱かせるだろうが、当の本人には正にどこ吹く風。そもそも彼女を見ることの出来る他人など存在しないのだから、気にするだけ無駄というものか。

閑話休題。東の耳に入ってきた一夏による東への言及である。

これはとても珍しいことだった。箒や千冬が時たま東の名を口にすることはある。そのほとんどは愚痴のようなものであったが、自分の名が彼女たちの口から紡がれるというだけで東には嬉しいもの。目覚ましのアラームからとても口に出せないものまで、様々な用途のため編集されるべく録音され続けてきたものだ。

しかし一夏が東の名を口にすることは本当に珍しい。これは一旦作業を止めて耳を傾けるのもいいかもしれない。そう東が一夏を映すディスプレイを自分の目前に移動させようとした時だ。聞きたかったはずの一夏の声ではない雑音が混ざったのは。

「ふむ。篠ノ之東女史、いや篠ノ之博士か」

声を発したのは見覚えのない女。一夏と隣り合ってベンチに座り缶コーヒーを傾ける女だった。

年の頃は一夏や箒と同年代だろうか。目は一夏から離さないままに片手でキーボードを操作。監視機械からGPS信号を受けとり位置情報を確認するとどうやら公園のようだ。

一夏が知人たちと複数人で遊びに行き、たまたま二人きりの状況にでもなったのだろう。はなから束の頭にデートなどという疑惑はない。一夏がデートするならば相手は箒しかいないと信じているからだ。ならば一夏がたとえ女子と二人きりであったとしても、相手が箒でない以上デートの筈がない。一分の隙もない完璧な論法である。

「ああ、ちよつと気になつてな」

「気になつた？ ボクと篠ノ之博士とはなんの接点も無いよ？ 織斑千冬の弟であるキミが知る以上のことなんて知つてははずもないだろうと思うのだけだ」

当然だ。ディスプレイを、正確にはそこに映る一夏だけを見つめながらフンフンと束は頭を上下させた。そんなどこの馬の骨とも知れない輩に自分のことについて尋ねるなんていっくんはどうしてしまったんだろうと、そんなことを考えながら。

「いや束さんの人となりとかそういう話じゃなくてさ」

とりあえず『束さん』の部分は録音した。出来れば千冬がそう呼ばれているように『束ねえ』とか、あるいは箒が自分を呼ぶ時の様に『姉さん』とか呼ばれている素材が欲しかったが。

もつとも音声同士を合成することなど束にとつては朝飯前なのだ。その気になれば『束おねーちゃん』と舌足らず気味に呼びかけてくるボイスだって作れる。多分3秒くらいで。

しかし合成なしのナチュラルとも言うべき音声には敵わない。自他ともに認める大天才がその才能を無駄にフル活用すれば、合成音声に違和感など一厘一毛、一清浄たりとも混ざること許しはしないが、しかし束が天才であるがゆえに理解できてしまうのだ。この音声はあくまで合成されたものだ。

これが天才であるがゆえに生まれる苦悩か。苦悩さんだつていい

迷惑である。こんな理由で生み出されるとは、……哀れな。

閑話休題。またしても話がそれた。今は画面に映る一夏とモブ子（仮）の話である。

「そりゃ東さんがどういう人かは知ってるんだよ。箒、つと幼馴染のことなんだが、そいつのお姉さんだし、千冬ねえの友達でもあるしな」『お姉さん』キタコレ。百万回保存した。比喻でも冗句でもなくガチで。

篠ノ之東謹製のスーパーコンピュータもこんな用途に使われるとは夢にも思わなかっただろう。世界最高のスパコンの数世代先を独走できるだけのスペックが盛大に無駄遣いされた瞬間である。

「そういう面じゃなくてさ、I S 開発者としての東さんについてって言うかさ」

「I S 開発者としての篠ノ之博士？ それこそボクに聞かれても答えようがないと思うんだけど。大学あたりで教鞭執ってる教授にでも聞かないと」

「大学教授て。俺なんてただの中学生だぞ？ いつ大学教授に質問するような機会が来るんだよ」

そもそも大学教授レベルに自分のことを理解できるはずなどないし訳知り顔で語られたくもない。そう東は思った。もつともそんな憤慨は一瞬で、いつくんI S に興味なんてあつたんだ、とそちらに思考を独占されてしまったが。

世界最高のI S 操縦者・織斑千冬の弟であるにもかかわらず、一夏のI S への興味は極めて薄い。それは長年一夏を盗撮という形で観察してきた東の結論であり、おそらく一夏本人も認めることだろう。で、あるならば、一夏のI S に関しての言及はモブ子との会話の切っ掛けづくりのようなものと察せそうなものだが、そこはさすがの篠ノ之東。他者への気遣いなどとは無縁の女。一夏の意図になどまったく気づかなかつた。

むしろ自分の研究に関して可愛い弟分が興味を持つてると知って（というか思い込んで）大はしやぎである。そりゃもう息子から『ママのお仕事かっこいいね』と褒められたカーチャン張りに『よしママ

頑張っちゃうわよー』ってなもんだ。おそらく彼女の取り掛かっているISが赤くカラーリングされ角が生やされ三倍の速さで動き出すのも遠い日のことではないはず。

しかしそのISに関してモブ子に尋ねるのはいただけない。そんな木端女にどんな回答を期待しているのだろうか。

ISに関して興味があるというのならその素振りを見せてくれればいいのに。そうしたら束から電話なりなんなり一夏にも接触していただろうに。

もちろん一夏の携帯番号も束は知っていた。というかメールアドレスからPCのブックマーク、はてはDドライブの中身まで全部まるっとお見通しである。さすがは天才科学者束さんと自画自賛する始末。惜しむらくはその天才の持つ辞書が不良品なことだろう。なにせ気遣いだのプライバシーだのといった単語が悉く存在しないのだから。うん、一夏。お前は泣いていい。

と、世界最高の頭脳のテンションが憤慨やら疑問やら大はしやぎやら苛立ちやら、超高速で上下にヘッドバンしている間も一夏とモブ子との会話は続いていた。

「ってかさ、ほら、——ってよく本読んでるだろ？」

「まあ活字中毒と揶揄されてもおかしくない程度には色々読んでるけどね。ああ、愛書家だの^{ビフロワイア}猟書家だの^{ビフリオマニア}といった呼び名は止めてくれよ？ ボクはあくまで活字を読むのが好きで読書家であって、書籍という^{モノ}物体に愛を傾ける倒錯者ではないのだから」

モブ子はニヤリと口元を歪めながらそう言いコーヒー缶を傾けた。妙に様になっているその姿が少し束の癪に障ったが、すぐに霧散する。天才の頭脳に有象無象に関して思考するリソースなどないのである。ちなみに一夏の発言中にある『——』はモブ子の名前であったが、そんなものを記憶するメモリもないのだ。

「で？ ボクが読書家であることとIS開発者としての篠ノ之博士について聞きたいということ、なんの関連性も見いだせない様に感じるのだけど？」

「あー、まあそうなんだけど、そうじゃなくてな。前にISの論文？」

みたいなの読んでただろ？ ほら、ナントカって科学雑誌のバックナンバー」

「ああ、確かに。ウチの中学の欠点だね。図書室の蔵書量の少なさというのは。あまりにも読む物が無いせいで手を出した記憶があるよ」
「……読みつくしたってことかよ。そりゃウチの図書室はデカイ方じゃないかもだけどさ」

一夏は呆れたようにそう言った。冷や汗でもかいているのだろうか、解像度の高い束謹製の盗撮カメラでも捉えることはできなかったが。

なるほど、ただの凡人ではないようだ。小さいと言っても中学校の図書室、その蔵書のすべてを読むなど努力だのなんだので出来ることではない。凡人とは違うナニカ、才能のようなものでもなければ不可能だ。

とはいえ多少人より秀でている点があったとしても東にとっては誤差のようなもの。はるか高みから見下ろせば老若男女、みな一様に豆粒である。東に記憶されるに足る存在とはならない。自分のいる高みまで昇ってきて初めて、東はソレが豆粒ではなく人であると認識するだろう。

しかし雑誌に掲載される程度のものとはいえISに関する論文をあんな小娘が読むとは。IS一色の女尊男卑時代、論文が中学の図書室程度にも置かれていたということには疑問はないが、しかし理解出来るはずなどないというのに。

「それで？ ボクがIS論文の掲載されている科学雑誌を読んでいたのをキミが憶えていたから篠ノ之博士について話題に出したというわけ？ ISそのものではなく？」

「あー。ってか俺ってISに関してほとんど何も知らないからなあ」

「ふむ。異性と二人きりで間が持たない時に出す話題として、相手の興味のありそうなことというのはそれなりに有効だろうと考えたキミの判断は概ね正しい。しかし余りにも唐突過ぎるうえ、キミ自身が話題となるものに対して会話を行えるだけの知識を持っていないと

いうのは減点だ。話すのはボクに任せて自分は頷いていればいいとでも思ったのかな？」

「……採点はやめてくれよ。しかもプロファイリングまでやってくるし」

「ちなみにそのプロファイリングはどちらの意味で言ったのかな？」

もともとの意味である人物像の類推？ それとも犯罪捜査における統計学としての犯罪者プロファイリング？ 後者の意味で使ったのだとしたら、自分が犯罪者だと自覚していることになってしまいうね。そうになると、か弱い乙女であるボクとしては恐怖で震えてしまいうねだよ」

「あーもー降参降参。あんまいじめないでくれ」

一夏はげんなりとした表情を浮かべて両手を挙げてヒラヒラと振った。

彼が女子相手にこんな表情をするのもまた珍しいことだった。今日は束の名前を呼んだり新鮮な表情を見せたりと珍しいことが続くものだと思つた。それを為したのが有象無象でさえなければ最高だったというのに。

「フツ。降参されたならこれ以上鞭打つわけにもいかないか。降り首は恥だしね」

「首つて。あんたはどこのお侍さんですか」

「そうだね、戦国時代なら越前がいいかな。ただし朝倉宗滴時代のね。上野で長野業正につくというのも燃える物があるけど」

「知らねー。戦国武将だよな？ 織田信長とか武田信玄とかじゃねえと分からねえよ」

ちなみにメタ的な言及になるがこの世界では歴女などのムーブメントは存在しない。

なにせ女尊男卑時代である。いくら過去の偉人といえ、格好良い男というのはウケないのだ。男とは卑しいモノ、そんな偏った価値観の弊害とも言えるだろう。

某放送局の一年ドラマも甲斐姫や井伊直虎、立花ぎん千代がメジャーどころ。利家はマツの添え物にされる始末である。いやこれ

は元からだっゲフンゲフン。

「ふむ。ISについて話題に出したのは残念だったね。戦国武将の話なら蘭ちゃんに呼び出された五反田君が戻ってくるまで十二分の間が持たせられただろうに」

「戦国武将の話題でも頷くことしかできなかつただろうとは思うけどな。会話を盛り上げるための前提知識が無いってのは減点対象なんだろう?」

「いやいや、マニアやオタクといった人間は自分の知識をひけらかしたくなるものなのさ。聞き手が大げさに驚いてくれると尚嬉しい。たとえば朝倉宗滴。彼は当時猛威を振るっていた一向一揆と戦ったわけだけど、この時敵方の一揆衆は三十万にもなると言われている。それを朝倉宗滴はわずか一万千の軍勢で打ち破ったという話があつてね」

「はあ!? 三十万に対して一万千ヨイで!」

「そう、そのリアクションだよ。キミとしても話のネタになる知識が得られるし、ボクとしても知識をひけらかして楽しい。しかし悲しいかな、キミはISについての話をボクに求めてきてしまった」

やれやれといった風に小娘は頭を振っている。しかもISの話題などつまらないものだとしても言いたげに。当然束としては面白くない。一万で三十万を倒したからなんだというのだ。一揆ということほとんどが農民だろう。竹槍持った農民の三十万くらいISに乗れば一人で殲滅できるのに。そんな益体もないことを考えて束は口をとがらせる。

「べ、べつに無理してISの話じゃなくてもいいんじゃないかな?

むしろソーテキさんの話の続きに興味津々なんです」

「いつくんも何言ってるのさ。気づけば束の口からはうーうー唸り声が漏れている。」

「申し訳ありませんが当店では返品および商品の取り換えはいたしかねます」

「クーリングオフ制度はどこいったんや」

「ごめんなさい、それ来月からなんですよ」

「あれ？　ゴネたらまずい？」

「クレーマーにはメギドラオンでございます」

「アームロックじゃねえのかよ!?　ネタがあっちこっちフラフラしすぎだろ」

しかし唸ってる束を余所にデイスプレイの中の二人はジョークを交えつつ普通に会話を楽しんでいるようだ。

自分にこんな思いをさせるなんて、あのモブ子は世界に要らないんじゃないか、むしろ消しちゃったほうが世の中のためになるはずだと束の思考は危ない方向へと傾きかけていた。

「さて、冗談はこれくらいにして、ISのことだったね」

「脱線どころか銀河鉄道かってレベルでぶっ飛んで行った話題を今さら戻すのかよ。ISについてもひけらかしたくなるほどのネタがあるってのか？」

「いや？　ボクの知識なんてのはほとんどが本で得たものだ。その点ISは歴史が浅くてね。ISを題材にした作品は少ないし、ネタに出来るほど面白い話もない。論文を読んだと言ってもぶつちやけ活字を目で追っていただけで理解なぞ欠片も出来なかったしね」

やっぱりね。そんな言葉と共に胸のすくような思いを束は抱いていた。

かつて自分がISに関する論文を発表した時、ほとんどの科学者は鼻で笑うような対応しかなかった。それは彼らに束の論文を理解するだけの頭が無かったからだと束は信じている。

画面に映る木端女も同じだ。束の論文が理解できないがゆえに興味のない振りをしているのだ。頭が足りないくせにそのことを認めようとせず、わざわざ読み解くまでもないモノだと遠ざけることで自尊心を守ろうとする。

一夏との話題からISを外し、別の話題へと誘導したのもISに関する知識のなさを露呈したくなかっただけの小細工に過ぎなかったのだろう。

そう結論付ける頃には束の中で一夏の隣に座る少女はどうでもい存在になりかけていた。消す面倒くささよりも目障りなモノを無

視したほうがマシだと思える程度には。

しかし、

「だがキミはISに関してではなく、IS開発者・篠ノ之束について聞いてきた。これは実はファインプレーだったのかもしれないね」

とモブ子は言った。

「ファインプレー？　束さんに関してなら話のネタがあるってことか？」

「そうだね。とはいえこれは知識なんてもんじゃない。あくまでボクの想像。歴史上の偉人をどんな人だったんだろうと想像するようなものさ。話のネタとしては面白いだろう？」

束としては面白くもなんともない。そもそも有象無象に自分のことを理解できるはずなどないし、想像などもとても無理だろう。

的外れな話をしたり顔で語って、こちらのことを理解できている風に振る舞われるなど虫唾が走る。

だというのに画面の向こうの会話は止まらない。

「しかもボクの目の前には当の篠ノ之博士のことを知っているキミがいるんだ。大雑把でもボクの想像に対しての答え合わせがある。こんな機会はそうそうある物じゃあない」

「そりゃまあ、……でも詳しく知ってるってわけじゃないぞ？　そもそも束さんのことを完璧に理解できる人間なんて、あの人と同レベルの天才くらいなもんだろうし。居ないけどさ」

「大雑把でもいいんだよ。所詮は話のネタだとも思って適当に間違っていそうなところにツツコミでも入れてくれればそれで十分さ」

ふん。束は鼻を鳴らした。あまりに下らない推論で自分を汚したら、その時は綺麗サツパリ消してやろう。そんなことを考えながら。

「ではいきなりだが結論から行こうか。ボクの考える篠ノ之博士。彼女の胸にあるのは絶望だ」

は？　そんな声が思わず漏れた。それは画面の向こうにいる一夏も同じだったようで。

「は？　絶望？」

「そうさ。いや、絶望という表現は正確じゃないかもしれないね。絶

望とは希望を失ったときに陥るものだ。元々望なんてものが無ければ絶望とは言わないかもしれない」

「いやいや、そりゃないって。束さんは底抜けに明るい人だぞ？ 身内として認めた相手にはって条件が付くけどそんな暗い人には……」
「性格が明るい人は絶望しないとでも？ いや絶望という言葉は違うと言ったばかりか。ならば軽蔑、あるいは諦観、それとも落胆？ いや落胆というのも落差が必要か。もともとから軽蔑しきっていたとしたら、そんな相手には落胆はしないものね」

この女は一体何を言っているのだろうか。束にも即座には理解できなかつた。

自分が絶望している？ 何に？ 意味が分からない。

しかし自分が軽蔑しているというのは分かる。確かに世の中にいる有象無象どもを見下してはいるが、それは自分のいる場所があまりに高みだからだ。見下ろす以外に誰かを見ることなど出来ないからだ。

それを顔も合わせたことのない小娘が想像、いや推理したとでも言うのか？ ならば自分が絶望しているというのも当たっているのか？

まさか。そんな言葉が独り言となって呟かれる。明るく可愛い束さんはそんな暗いモノを持ってはいませんよーと。画面に映る一夏に向けて言葉が投げられる。

「いきなりすぎて言葉も出ねえよ。っていうか何がどうなったら束さんが絶望しているなんて想像が出てくるんだ？ ISを開発して世界を自分好みに作り変えちゃうような人だぜ？」

「フフツ。なんというか、期待していたリアクションをそのまま返してくれて嬉しいよ。いきなり結論から始めればそういつてくれると信じていたさ」

「冗談だったってことか？」

「いや、冗談なんかじゃないよ。ボクは篠ノ之博士は絶望していると想像している。出来れば外れてほしい想像ではあるけどね」

「……分かんねえな。何がどうなったらそんな結論が出るのか最初か

ら話してくれよ」

ふむ、そう頷くと少女は缶コーヒを口に運んだ。まるで口の滑りをよくするためでも言うように。

「最初、というとな何になるのかな。……そうだね。キミは昨今の女尊男卑についてどう思っている？」

「女尊男卑？　それが束さんと何の関係が？」

「いいから。どんな暴論でもいいよ？　むしろ男性視点の意見というのも聞いてみたいしね」

少女がそういうと一夏は腕を組んで眉根を寄せた。そして少し低くなった声で言う。

「うーん。うまく言えないけど、なんていうか、良くはないかなって」「良くはない、ね」

「ああ。女だから偉いとか、男だから女に従えだとか、そういうのって違くないか？　人ってさ、そういうんじゃないだろ？」

「ふむ」

「だからって男尊女卑が良いっていうわけでもなくてさ。……なんて言ったらいいのかな。俺は千冬ねえのことを尊敬しているけど、それは千冬ねえが女だからってわけじゃない。弾のことを良い奴だと思ってるけど、それは弾が男だからってわけじゃない。尊敬できる女の人を女尊男卑の世の中だから尊敬してるんだって言われりや嫌だし、良い奴だと思ってる男を女尊男卑の世の中だから女に顎で使われても普通だなんて言われりや悔しい。でも今の世の中はそれが当たり前になっちまって……」

「なるほど。キミは自分の感情は自分の中から湧き出たものだと言張って言いたいわけだ。そして女尊男卑という枠組みよりも人には大切なものがある、と」

「そう……なるのかな？　なんか女だからとか男だからとかに囚われ過ぎてるような気がして」

一夏は自信なさげだが束には十分立派に見えた。

今の女尊男卑時代、男と言えば女の顔色を伺うような人間ばかり。上から目線で指図されても唯々諾々と従う者ばかりなのだ。

そんな中で胸を張ってこんな世界は間違っていると言える人間がどれほどいるか。異端とされることすら覚悟し前に進もうと思える者がどれだけいるか。

鼻屑目があることは否定しないが、それでも東には弟分が立派に育っているように思えた。

「なるほどなるほど。こういうのを青臭い意見だとも言うのかな？」

「いやはや、若いってというのは素晴らしいね」

「……あのー、茶化されると小っ恥ずかしくなってきたら止めて貰っていいですかね？　ってか若いも何も同い年だし」

ニヤニヤした笑みを浮かべる少女にそう言うと、一夏はジト目で促した。

「女尊男卑について——はどう思ってるんだよ？　俺は言ったぞ？」

「フツツ。そうだね。女尊男卑時代か」

そういうと少女はおもむろに立ち上がり、言った。

「あえて言おう！　カスである」と！

「……お前はネタ挟まんと死ぬんか」

やりきったぜといった表情の少女にげんなりとした顔で一夏がツッコむ。

「いやまあネタには走ったけど紛うことなき本心だよ？」

「カスである？」

「うむ。カスである」

神秘的な面持ちで少女は一夏の言葉にうなずき、再びベンチに腰かけた。

位置は先ほどと同じ、隣の一夏とは近すぎず遠すぎずと言った場所へ。

「なんていうか、意外だな。女尊男卑って女性にとっては嬉しいもんだと思ってたから。色々優遇されてるじゃん？」

「優しくされたからってだけで好きになるとは限らないだよ。乙女心は複雑なのさ」

「……世の女性たちは女尊男卑に迎合してるんですがソレは？」

「ちよろっと優しくされただけで股を開くとか、ビッチじゃないか」

「……女性上位主義者が聞いたらブチ切れそんなこと平気で言うのな」

「ああはなりたくないね。ヒステリックでみっともない。っと、話がそれた」

少女はわざとらしく咳払いを一つ。

「女尊男卑についてだったね。キミはなんでこんな価値観が世の中にでてきたか知ってるかな？」

「いや知らない方がおかしいだろ。ISの登場によってだろ。ISは男には動かせないから」

「Exactryかっこその通りでございますかつことじ」

「いや、ネタはもういいから」

「なんだつまらん。キミにツッコまれるたびボクの体にえもいわれぬ快感が迸っていたというのに」

「やべえよ、コイツまじやべえ。ってかそれ他の奴のいるところで言うなよ！ 良くてサツ行き最悪千冬ねえにミンチにされる」

「フッフ。二人だけのヒ・ミ・ツ、というわけだ？ ドキドキするね」
二人の会話を聞いていた束としてはうんざりだった。自分が絶望しているなんて斜め上の意見にほんの少しだけ興味を持ってみたというのに、ちっとも会話が先に進まない。

やはり凡愚の言葉を聞くのは苦痛だ。要領を得ず回りくどい。一の説明で済む物に十も二十も言葉を重ねるのだ。さらに束側にも十も二十も説明を求め、しかし一ですらも理解できない凡愚。だというのにそれが有象無象どもの中では秀でている方だというのだから笑えない。

画面に映るこの女も連中の同類だ。束にしてみれば凡愚などではないはずの一夏が何故こんな女と親しげに会話を続けられるのか理解できないほど。

「さて、いい加減に話を進めようか。というか五反田君が戻って来るまでに答え合わせまで辿り着けなかったりしたら悲しいものね」

「そう思うんならネタ挟んでくるの止めろよ？ もうネタ発言禁止な」

「なん……だと……？」

「だからソレやめろって。お前はホント残念だな。パツと見おしとかで普段は物静かな文学少女って感じなのに、口を開けばコレなんだから。何人の男がお前の実態知って泣き崩れたことか」

「それでも好きだつて泣きながら言うてるのもいたけどね。キミも告白してもいいんだよ？ ロメロスペンシャルで返事してあげる」

「当たって砕けろとは言うけどさ、当たって関節砕かれて来いとは言わねえよ」

「虎眼流心得、伊達にして帰すべし」

もうヤダコイツと言わんばかりに一夏が手で顔を覆うが言われた本人はどこ吹く風。むしろそんな一夏を眺めてニヤニヤしていた。

「さて、どこまで話したか。女尊男卑の発生についてかな」

「シレッと話題戻すのな。そういうところ尊敬するわ」

「まあキミの尊敬の念はあとでカラアゲちゃんという形でいただくとして、だ。ISの活躍と共に女尊男卑はあつという間に広まっていたわけだが、これは何故かな？」

「皮肉が通じねえし。って、ん？ だからISに乗れるのが女だけだからだろ？」

「そう。ISを動かせるのは女性のみ。そして軍事的に見て、IS以外の兵器を操る男とISを駆る女が戦えば女性陣側が勝つそうだ」
「だから社会的なパワーバランスも変わって行って、女が偉いつてことになったんだろ？」

二人の話は概ね間違つてはいない。画面の中の一夏だけを見て、ほとんど聞き流していた東も頷いた。

加えて言えば現在の女尊男卑の風潮は、長い男尊女卑の時代を過ごした女性側の反逆でもあるそう。東としてはなんら共感できない思考ではあつたが、どういうわけか世界は皆足並みを揃えて女尊男卑を推し進めていったのだ。

「さて、キミはボクの言った女尊男卑に迎合しているのはクソビッチだと言ったことは覚えてるかね？」

「クソはついていなかったとは思いますが、まあ」

「あの発言に関してボクは訂正しなくてはならない。今の女尊男卑を
迎合している連中は雌犬ヒツチなどではない。ただのゴリラだ」

ぶはっ、と一夏が吹いていた。そのままゲホゲホと咳き込んで息を
整えると、信じられないものでも見るように少女を見つめる。

「いいかい？ 女尊男卑とはつまり強い方が偉いという理屈から始
まったんだ。ISと他の兵器が戦えばISが勝つからISの方が偉
い。ISに乗れる女のほうが乗れない男より強いから偉い。ね？

強い＝偉いという理屈が現在の女尊男卑時代を作っているのさ」

「お、おう。でも強い奴が尊敬されるのは今も昔も……」

「アホかねキミは。強い奴が偉い、強い方に従え、そんな理屈が通じる
モノかよ。強者は弱者を蹂躪してもオーケーなのか？ 弱者は強者
に虐げられても仕方がないのか？ 先進国は発展途上国に石油のカ
ツアゲをしても許されるのか？ 柔道の金メダリストはそこらの中
学生捕まえて、弱いお前は強い俺様のために焼きそばパン買って来い
よと命令してもいいのか？」

「いやそりゃ間違いないくバツシングで炎上だけどさ」

「しかし女尊男卑主義者は恥ずかしげもなく主張するんだよ。弱い男
なんだから強い女のためにアレをしろ、コレをしろってね。まったく
世の女どもはこのゴリラだ。いや、ゴリラに失礼だな。これからは
始め人間オフレッサーと呼ぼう」

「原始時代の勇者かよ」

「その通り、原始時代さ。強い奴が堂々と偉ぶっていられるなんての
はね」

しかしね、そう少女は続けた。

「人類は何万年もかけて進歩してきたんだ。それは遅々とした歩みに
思えるかもしれないが確かな歩みだったんだ。小さな集落のちよっ
とした教えから始まったものが、掟になり法になり、そして秩序へと
なっていた。強者が尊いとされたのは最早神話の時代のこと、そう
思えるほどに長い時をかけ人類は秩序を手に入れたんだよ」

「……」

「男尊女卑なんてものだって段々と無くなって行ってたんだ。男女平

等、それは完全に実現できていなかったのかもしれないけれど、それでも種は蒔かれていたんだ。たとえば時間がかかったとしてもいずれ芽吹く新たな秩序だったはずなんだ。しかしISが、いやISという自分たちだけの力に酔った女どもがぶち壊しにした」

「力に酔った、か」

「くだらない。唾棄すべき蒙昧さだ。浅薄と断じざるを得ない。何万年とかけて育んできた人類の秩序は崩壊し、今や力こそ正義、良い時代になったものだとのたまたまう阿呆ばかり」

「世紀末とか、とつくに過ぎてんだけどなあ」

「まさか女に力を与えた途端、人類の価値観が原始時代まで戻ってしまうなんて。読めなかった、この海のリハクの目をもってしても」

少女の声に力があつたのはそこまでだった。

「ISは元は宇宙開発用のマルチフォームスーツとして開発されたそうだ。篠ノ之博士は目指したはずなんだ、あの空の向こうの宇宙を。新たな世界を。人類に……黄金の時代を……」

「……凹むかネタに走るか一方にしてくんね？　ぶつちやけ対応に困るゼメルツエル」

「だというのにISは軍事利用され、今じゃ競技用の道具扱い。人類を躍進させる筈のスーツは人類の秩序を、弱い男は強い女に従えなんて原始時代のソレにまで巻き戻してしまった。そんなISの生みの親となった自分を想像したことがあるかい？」

「……ハアア……。それで、絶望か」

「人類を宇宙という新たなステージへと昇らせるためのISは、人類の価値観を原始時代にまで逆行させるタイムマシンにされてしまった。篠ノ之博士に軽蔑されても仕方ないと思うのだよ、人類とはここまで愚かだったのか、ってね」

東は黙ってそれを聞いていた。目は逸らさず、一夏ではなくその隣にいる少女に向けられていた。

東の胸中に渦巻く感情を、東は何と呼べばいいのか知らなかった。

初めてだったのだ。初めて理解された気がしたのだ。しかし……、誰もが東のことを理解できなかった。理解しようとしたものも気

が付けば離れて行ってしまった。

妹である箒もそうだった。東のやることは理解できないと、諦めの混じった視線を向けてきた。それでも姉として思ってくればそれでいいと、東自身妥協していた。

親友である千冬もそうだった。東のやることなら仕方ないと、無理矢理自分を納得させている気配を滲ませていた。それでも唯一無二の親友なのだからと、東自身気づかぬふりをしていた。

思い出す。初めてISに関する論文を発表した時のことを。

あの時自分は確かに宇宙を夢見ていた。

なのに狂ってしまった。夢は一笑に付され、それでもISを認めさせようとして、

(ああ、……そうか)

初めに力こそ正義だなんて価値観を掲げたのは自分だったのだ。

ISを認めさせるために白騎士事件を起こした。それがどんな結果を引き起こすのかも考えないで。ただISの力を見せつけられればだれもが認めるだろうと、そんな思考に縋り付いて。力を見せつけたのだ。認められるのはまさにその『力』だけだと分かりそうなものだというのに。

そこからはもうドミノ倒しだ。無理にスタートを切らせたせいで崩れたドミノは、その崩壊を広げるように次々と想定していなかった崩れ方を繰り返して、出来上がるはずだった絵はぐちやぐちやになっていった。

こんなはずじゃなかった。そう叫びたかった。でもそれは自分のこの未来を見通せなかったことを認めることと同じで。

天才として生きてきて、挫折など知らなかった自分にはそんなことは耐えられなかった。ISが認められなかった時でさえ力技で自分の挫折をなかつたことにしたのだ。

だから狂わせた。初めからこうなることを望んでいたのだと自分の記憶を狂わせた。兵器としてのISを本来のISのカチチだと思いつくことにした。必死に狂ったフリをしてきた。

記憶を騙せたとしても感情を騙せることなど出来るはずもないと

いうのに。

(ISを兵器として使う奴も、ISの力で偉い気になってる奴も、私のことをきちんと理解できない奴も嫌いだった)

全部、自分のことではないか。

(狂ってしまった世界も、狂ってしまった有象無象も)

全部、自分が狂わせたのではないか。

(因果……応報……ってやつ、かな。昔の人なんてちよつと前に生まれて死んだだけの有象無象だと思ってたけど、ためになる言葉、残してたんだなあ)

ぐたりとテーブルに頬を付け、ディスプレイに映る二人を見る。

篠ノ之束の狂わせた世界で、それでもマトモで居続けるかけがえのない人間を。

「で、答え合わせ、してくれるのかな?」

「ネタで茶化さないのかよ?」

「ネタ挟まないと重い話過ぎて続けられなかったんだよ。言わせんな恥ずかしい」

「確かに重かったなあ。で、答え合わせだっけ?」

「そ。キミから見た篠ノ之博士はボクの想像に当てはまりそうなのかな? ボクとしては絶望だの軽蔑だのは全部杞憂で、天才の心を心配する必要なんてない、なあんでキミが言ってくれると嬉しいんだけど」

一夏は腕を組み眉根を寄せた。うーむと唸りながら悩んでいる。

(いっくんはどう答えるのかなあ。ちーちゃんならわざわざ心配してやる必要などないとか切って捨てそう。箒ちゃんはあの人に人並みの感性を期待するとかかなあ。うわあ、ひどい)

「ぶっっちゃけた話、肯定も否定も俺には出来そうにないんだよなあ。

千冬ねえや箒ほど付き合があつたわけじゃないし」

「つまり篠ノ之博士のことを良く知らないからどっちとも言えない、

と? コイツマジ使えねえ」

「だまらっしやい。でもまあ、大丈夫なんじゃねえの?」

(それはどういう意味で?)

「それはどういう意味で？」

奇しくも束の思考と少女の言葉が重なった。

「うーん。なんていうか、束さんっていろいろぶっ飛んでるひとだからなあ」

「ボクのような凡人の感性とは別のモノを持っているっていう意味かな？ だから今の人類を見てもなんとも思わない、と？」

「そういうんじゃないかな。うーん、あの人って天才なわけだ」

（『こうなること』を予測したうえでISを作ったんだろうから今の世界も計算の内ってことかな？ だから落胆なんかしないだろうって？ だとしたらいつくんは束さんのことを買いかぶり過ぎだなあ。まあ天才である束さん自身、あの子に気づかされるまで自分がそういう人間なんだって思い込んでたわけだけどさ）

「あー。なんつったらいいか。上手く言えないんだけどさ、束さんってあの千冬ねえの親友なんだよ。で、生まれる時代が違えば赤兎馬乗って伝説作っちゃまいそうなあの人の親友になれるような人が、弱いわけないとも思うんだよな」

「絶望に負けるほど弱くはない、って？」

「っていうかさ。あの人が人類に絶望したって言うなら、次の瞬間には世界ごとひっくり返しに来そうな気がする。ISがオフレッツサーを生むなら、もうみんな死ぬしかないじゃないって感じで」

「……うわあ。わけがわからないよ」

画面の向こうでは少女がドン引きしていた。

一方で、先ほどまで少女と似たり寄ったりなりアクションで画面を見つめていた束は、

（アハッ。やっぱりすごいなあいつくんは。ちーちゃんの弟だけあるよねえ）

満面の笑みを浮かべていた。

「世界がどうだとか人類がどうだとかさ。俺らみたいな凡人には受け入れていくしかないことでも、それでも束さんなら、束さんならきつとなんとかしてくれる」

「仙道はなんとかしてくれなかったじゃないですかヤダー。ってなん

でキミがネタに走り出すのさ」

「お前のテンションがダダ下がりしてるから何とかしようとしてるんじゃないか。言わせんな恥ずかしい」

画面の向こうの二人が笑い、それを見て東も笑った。

笑顔という表情を作ろうとするのではなく、楽しいという感情から自然と笑顔になったのなんて、一体どれくらいぶりだろうと、そんなことを考えながら。

(いっくんにあそこまで言われたらなんとかしてあげないとね)

今のこの、東にとつても心底気に食わない世界が、しかし東が原因となって生まれたというのなら、責任をとるしかないだろう。

女尊男卑もI S主義も、力を得ただけで自分たちが偉くなったと錯覚してる女も、力が無いってだけで俯いて立ち上がりうともしない男も、みんなまとめてなんとかしてあげる。

(だって私は、天才科学者・東さんだからね)

空中に投影されているディスプレイを脇へとずらす。画面の中では相も変わらず二人の少年少女が何かを話していて、それを眺めたい欲求は確かにあったが、それでも作業用のディスプレイへと向き直る。

やりたいことが出来たのだ。やらなきゃいけないことがあったのだ。

指をキーボードへと走らせる。残像の見えそうなほどに高速で指が走り、ディスプレイに文字列が刻み込まれる。

(そして、いつになるか分からないけど、きちんとやるべきことをやり終えたら)

その目は真剣そのもので、頭脳は天才などという評価では足りないほどに高速で回転していたが、

(その時は画面越しじゃなく、ちゃんと会って、お話ししてみたいかなあ)

口元には、確かな笑みが残っていた。

ランスネタ

LP0020年

統一と分裂を繰り返していた戦乱の国JAPAN。第四次戦国時代の終結より十余年、現在のJAPANを統一し盟主の座に就いた織田家には一人の若き侍が居た。

民草は言う。織田家家中に三法師あり、と。

刀法。

名高き妖怪王・独眼竜政宗より織田流刀法を学び、織田の宿将・柴田勝家や軍神・上杉謙信ら豪傑との鍛錬によって磨き抜かれたその技は正しく絶技。腰に佩いた大業物をひとたび抜けば、あらゆるものは斬って捨てられるだけの有象無象へと成り果てる。

軍法。

北条家当主にして陰陽道宗主・北条早雲や軍神の右腕・直江愛、最後の風林火山・真田透琳らの薫陶を余すことなく吸収した頭脳は、若くしてJAPANにおいて最高峰の智慧を宿した。その深謀遠慮はどれほどの未来を見通すのか。

弓法。

母・山本五十六より弓術を学び、その弓の腕は既にJAPANに並ぶ者なし。見る者に感嘆の声を上げさせるその技の冴えは、三代目帝・織田香をしてJAPANの宝と称えられるほど。種子島の砲火ですら、彼の弓の前では児戯にも等しい。

刀法、軍法、そして弓法。三法修めし三法師。織田家家中は山本家が跡取り、山本乱義に渾名されし名であった。

そんなJAPAN中に勇名を轟かせる乱義は、しかし現在、織田家の重臣たちの悩みの種となっていた。

「むう。困ったことになりましたな」

眉根を寄せて声を発したのは織田家の家老・3Gである。いつも口喧しい三面の妖怪も今は口が重い様子。

「申し訳ありません。母として出来る限りのことをしてきたつもりではありましたが、まさかこのようなことになるうとは」

心底申し訳なさそうにしているのは山本五十六。かつては女武将として毅然と部隊を率いていた女傑も、どこか表情を陰らせていた。

「いえ、五十六殿を責めるわけにはいきませぬ。むしろ乱義殿の教育を任されていた我らの方こそ詫びる必要があるかと」

今にも頭を下げようとしていた五十六を止めたのは、天志教の大僧正にして織田家の相談役となっていた性眼である。天志教の秘奥によつて八十を越えてなお若々しいその顔は、しかし苦渋に満ちていた。

「「まさか乱義（殿）が引き籠ることになろうとは」

余人介さぬ一室にて、深い深いため息を三人は吐いたのだった。

きつかけは慶事であった。

JAPAN三代目帝にして織田家当主・織田香の懐妊。武家の女としては遅くはなったが、しかしまぎれもない慶事であった。

JAPANの棟梁となりながら長く婿を取ることもせず独身で居続けた香姫であったため、跡継ぎとなる子の懐妊はJAPAN中で喜ばれ、早くも友好国であるリーザスやゼスから祝いの文が送られてきた。時を待たず祝いの品々も届けられることとなるだろう。

しかし問題が無かったわけではない。一点、いや二点ほど。

一つは香姫が懐妊したにもかかわらず、夫であるはずの男の不在である。

本来ならば醜聞になりかねないほどの問題のはずが、しかしそうはならなかった。

JAPANの民草にとつて帝とは絶対のものである。たとえその存在すら知らない俗世を離れて久しい修験者であったとしても、その姿を見ればたちどころに平身低頭してしまうほどの威光。無条件にその全てを肯定してしまう神聖さを宿すのだ。そんな帝でもある香姫が、誰とも知れぬ男の子を身ごもったからと言って、非難の声など出ようはずもなかった。

JAPANの上流階級、すなわち武家の者も例外ではなかったが、しかし武家の者たちにとつては別の感想が出てくる。『またやりやがったのか、あの野郎』である。

前例はあるのだ。他でもない山本五十六を筆頭に毛利家長姉・毛利てる、徳川の戦姫・徳川千もそうだったのだ。

そもそも天満橋の向こう側ではもつとすごいことになっている。リーザス女王・リア・パラパラ・リーザスにゼス女王・マジック・ザ・ガンジー、カラーの先代女王・パステル・カラー、ヘルマンのシーラ・ヘルマンに至るまで。国家元首となる女性には相手を明かしてはならないという決まりでもあるのかと疑ってしまうレベルである。もつとも子を成した相手を夫として迎えてしまえば、周囲のすべての国からフルボッコを喰らいかねないのだが。魔人にも手を出してるとかいう噂まであるのだ。

とまあそんなわけで香姫の懐妊は慶事として扱われた。問題などどこにもなかったと言わんばかりである。

しかし現在織田家の重臣たちの頭を悩ませているのはもう一方の問題である。

それが織田家が誇る三法師・山本乱義の引きこもり化であった。

「乱義が香様に強い感情を持っているのは分かっておりますが、それはどちらかというと主君への忠義といえますか、帝への敬愛、あるいは、これは身の程をわきまえていないかもしれませんが、そう、姉に対する親愛のようなものかと思っておりますもので」

そう、乱義の引きこもりの原因は香姫の懐妊にあった。ぶっちゃけてしまえば失恋していじけているようなものである。

「いやいや、身の程などと寂しいことを言うてくださいますな、五十六殿。香様も乱義殿を弟のように思うておるはずじゃ」

「ですがそれだけに難しい問題ですな。香様には乱義殿は病に伏せていると説明していますが、……見舞いたいと仰られているのでしよう?」

「もう九日、じゃからのう。香様には元気なお世継ぎを産んでもらうためにも心労をかけたくななどないんじゃが」

「まことに申し訳ない限りで」

頭を下げようとする五十六を3Gと性眼は必死で押しとどめる。これまで乱義に苦勞を掛けられたことなどなかったのだろう、五十六はひどく憔悴しているようだった。子育てにおいて初めて直面する問題としては、これはあまりにも重いものだった。

3Gは一つ溜息をつくると既にぬるくなってしまっている緑茶を啜った。渋かったのだろうか表情をゆがませる。見れば右のも左のも渋い顔をしていた。

「乱義殿の思いを勘違いしていたのは儂らも同じ。というか父親がアレですから。恋慕の情を抱こうものなら形振り構わず突っ走っておるはず、思いを胸に秘める姿なぞ想像も出来んなどと思っておったわけじゃし」

「その結果がコレですからね。ただの失恋ならばまだしも、思い人が父親と、ですから。乱義殿もそのことは知っておられるのでしょうか？」

「誰かから聞いていたとしても不思議ではありません。異母弟とも仲良くさせていただいておりますし、父親の話題になったとしても不思議ではないでしょう。ひととなりを知っていたとすれば、……アレは聡い子ですから」

「でしような。……むう。こんなことになるならば見合いの一つや二つ経験させておくべきでしたかな。下手におなごに興味を持たせると父親の血が暴走するやもと思ひ遠ざけてきたんじゃが」

「才気煥発にして温和勤勉。素質に優れた子がまつすぐに成長していただだけに、それを歪める要素を恐れるのは仕方のなかったことかと。父親がアレですし」

「い、良い人なのですよ？ その、……優しいところもあったり」

「十五にもなる息子に一度も顔を見せたことない父親なぞ」

「そもそもこういう問題に頭を悩ませるべきなのは父親であるべきでしょうに」

想像してみる。あの男が失恋諸々のショックで息子が部屋に引きこもってしまったと知ったとしたらどうするか。

まず間違いなく心配などしないだろう。それが三人の共通認識であった。

むしろ大口を開けて笑いそうな気がする。奴にとって香姫は自分の女なのだ。息子だか何だか知らんが俺様の女に横恋慕した挙句失恋してやんの、ガハハ、ざまあみろ。そう笑う姿が鮮明に想像できてしまった。もういい年だというのにちつとも落ち着かない男である。「どうしたものかのう。今からでも釣書を用意しますかな？ 新たに思い人でもできれば香様のことは過去のことに割り切れるやもしれんが。山本家は既に織田家を支える支柱が一つ、次代のことを考えるのは武家としておかしくはないんじゃない？」

「元服も済んでおりますし、乱義殿の器量であれば相手を選ぶに困ることなどないのですが。しかし乱義殿の心情を思えば……」

「酷な話、ですか？」

「でしような。まずは立ち直っていただくことこそ肝要かと」

「立ち直らせるつもりが傷に塩を塗り込むことになりかねない、と？」

むう。そんな呻き声にも似た声が漏れる。

と、しばらく沈黙を保っていた五十六が顔を上げた。

「思えばあの子には過保護であったのかもしれない」

五十六の口から出たのはそんな言葉だった。

「山本家の没落や太郎を足利に奪われたことで臆病になっていたのでしょうか。何かに付けて世話をしすぎてしまったようです。このようなことでたやすく折れてしまうなど、鍛え方が足りませんでした」

「い、五十六殿？」

「香様が帝となられJAPANに平和が訪れたとはいえ、山本家の跡継ぎとして懦弱に過ぎます」

一つ乱義を擁護するならば、彼の人生は決して過保護と言えるようなものではなかった。

なにせ父親が『あの男』である。アレにそっくりな男になってしまったら織田家は、JAPANは内側から崩壊しかねない。そう思った者は決して少なくなかった。

それゆえのスパルタ教育。刀法軍法弓法は言うに及ばず、倫理面で

も英才教育が施されたのだ。

3Gや性眼はもちろんのこと、浅井朝倉の朝倉義景や元・巫女機関の名取なども加わった乱義の教育は、父親である『あの男』ならば三日どころか三刻と持たず逃げ出すこと必死の厳しさであった。

いくなれば山本乱義はJAPAN中の武将に鍛えられてきたのだ。三代目帝・織田香に、もし帝レースの開催が数年遅れていれば、あるいは山本乱義が数年早く生まれていれば、帝レースの勝者は自分ではなかっただろうと言わしめた実力は、決して才のみによったものではなく、たゆまぬ鍛錬の結晶であったのだ。

だというのに五十六が息子を懦弱と断じたのは、はたして息子にかける期待の裏返しか。それともあの子の父親ならばこの程度の挫折、笑って乗り越えてしまおうという思いがあったからなのか。

「無理やりにも部屋から引つ張り出しましょう。住み慣れた屋敷ではありませんが、火をかけることも厭いません」

「五十六殿お!？」

「成美、多聞! 弓を持って! まずは山本流疾風点破にて乱義の部屋を吹き飛ばします!」

「いかん! 3G殿、乱義殿を逃がすのです! 錯乱しておられる!」

「う、うむ! 武運を、性眼殿!」

「御放し下され、性眼殿! 私は錯乱などしておりません! 息子の不始末のツケは母である私が!」

にわかに騒がしくなった屋敷にドタドタと走り回る音が響く。

沈み、どこか淀んでいた屋敷の空気が、一気に活気づき始めていた。

そして数日後――

「ええと、なんだかよくわかりませんが、……いつてきます?」

JAPAN西端・天満橋。大陸とJAPANをつなぐ唯一の場所に山本乱義はいた。

「うむ。なんだかよくわからんが行ってくるでござる。たぶん武者修行とかそんな感じでござろうし」

豪快に笑って乱義の背を叩くのは柴田勝家。3Gから乱義を預けられとにかく尾張から離れさせよと言われたため、なんとなく大陸の入り口までやって来てしまっていた。

「弓は3G殿が持つてきてくれていましたし、太刀も種子島を通った時に業物を手に入れることが出来て幸運でした」

「てばさきがカイロで手に入れられたことも幸運でござるよ？ 戦国のころは貝・信濃以外でてばさきを見ることなど出来なかったでござるし」

へー、と乱義は感心した様子でてばさきの首を撫でる。真田透琳からてばさきの騎乗術も習っていたため手慣れた様子だった。

「うむうむ。太刀に弓、てばさきまであるとくれば大陸でも恐れることなど無いでござるな。武運を祈るでござるよ」

「はい。勝家殿もご健勝で。それでは」

乱義は手綱を握り直し、

「山本乱義、行って参ります」

てばさきを勢いよく駆け出した。

これは物語である。

狭いJAPANから駆け出した山本乱義の物語。

人類同士が闘い争い殺し合った大陸を、人類と魔人の戦争が繰り広げられた世界を、その騒乱を治めた英雄の息子が往く物語。

英雄の物語の後日譚などでは決してない、一人の若き侍の物語である。

……まあ、失恋から立ち直るための旅とかいう、しょっぱい物語なのだが。

R a n g i o l ——— 光を探して ———
始まります

ハイスクールD×Dネタ

レーティングゲーム。それはかつて天使・墮天使・悪魔の三大勢力の大戦において大きく数を減らした悪魔たちが、目に見える形で発生した種の存続の危機を回避するために生み出した制度である。

人間を眷属へと転生させることによる悪魔の絶対数の確保、ゲームという形をとることでの安全な実戦経験の獲得、チエスの特性を取り入れることによってなされた少数精鋭化。

様々な意図をもって編み上げられたレーティングゲームという制度は、しかし現在、結婚なんてしたくないと拒絶をあらわにする女と、眷属根絶やしにしても連れ帰るからなと意地を張る男の、昼ドラみたいなもめ事の舞台にされていた。

そしてそんなレーティングゲームに参加する男が一人。現在七人もの悪魔に囲まれ孤立していた。

彼の名は坂本秀。駒王町にてレイナーレ率いる墮天使勢力と、この地に根を張るグレモリー眷属とがぶつかり合った事件に巻き込まれ、兵藤一誠とほぼ同時期に悪魔へと転生した高校一年生。神器を宿し、リアス・グレモリーによって『戦車』の役割を悪魔の駒によって与えられた少年である。

客観的に見ても絶体絶命のピンチである。当然だろう。神器を持ち悪魔として転生したとはいえ、秀は少し前まで人間だったのだ。戦いなど当然経験にたく、やったことがあるとさえいばせいぜい殴り合いの喧嘩程度、それも相手に怪我をさせまいと無意識のうちにブレーキを踏みあうような、悪魔にとってはじゃれ合い以下の喧嘩しかしたことが無いのだ。そんな素人以下の秀が、レーティングゲームという実戦を何度も経験した悪魔七名に囲まれる。いかに悪魔側が秀をヒョコ以下のザコと侮っていたとしても、危機的状況と判断されるには変わりないだろう。

だというのに秀の表情に焦りはなかった。レーティングゲームにおいてはプレイヤーの安全が保障されるから、と言うわけでもないの

だろう。なにせレーティングゲームが保障するのは『命』の安全なのだ。

戦いにおいて死を恐怖できる者は稀だ。大抵の者は痛みを恐怖する。斬られ、焼かれることによって生まれる苦痛をこそ恐怖するのだ。レーティングゲームにおける『命』の安全が、戦いにおける素人以下の秀に楽観を与えられるはずもない。

だというのに秀に焦りはない。それどころかどこか嬉しそうに自分をとり囲む七名の悪魔を見渡していた。

「おかしな方ですわね。事前に聞いたところによれば元人間、それも転生してからさほど経ってないそうじゃありませんか。だということにこの状況をどうにかできるとでも思ってるのかしら?」

秀に声をかけたのはレイヴェル・フェニックス。秀にとっての敵チームであるライザー陣営の『僧侶』にして、『王』であるライザー・フェニックスの妹である。

「たまにいますよ。神器をもって生まれただけで自分のことを絶対的強者だと勘違いする人間って。そういう方に限って単独で行動し、敵に囲まれても畏れなかったとか言い出すんですよ。自分を餌にして敵をおびき寄せて一網打尽に、とか考えるんでしょうね。貴方もそのクチなのかしら?」

だとしたら貴方も鎧袖一触で倒して上げますわ、今までそうしてきましたように。レイヴェルは上品な笑みを浮かべながらそう言うが、

「いやいや、んなわけねえじゃん。アンタがさっき言ったように俺は転生したての生まれただぜ? 言ってみりや足の震えも収まっただねえ小鹿ちゃんよ。それが一対七なんて状況に放り込まれりやどうしようもねえっての」

でもよ、そう秀が楽しそうにつぶやいた時だ。ライザー陣営の悪魔たちが警戒したように飛びずさった。

「一対七じゃなく、四対七ならなんとかなる、ってな」

飛び込んできたのは兵藤一誠。神滅具『赤龍帝の籠手』を有するリアスの『兵士』。

「加勢を卑怯とは言わないだろうね? まだそちらの方が数が多いん

だし」

さわやかな笑みを浮かべて歩み寄ってきたのは木場祐斗。神器『魔劍創造』によって生み出した魔劍を手に、秀と肩を並べる。

「でも私たちが尾行していることに気づいているとは思いませんでした。てつきりいつものように何も考えずぶらぶらしているものかと」

意外そうな表情で秀を見ながらトコトコ歩いてきたのは塔城小猫。秀と同じ『戦車』の駒をリアスから与えられた眷属悪魔。

七対四。未だライザー陣営の数的有利は覆されてはいないが、しかし状況は一変した。グレモリー陣営にあらたに『騎士』と『戦車』が参戦してきたうえに、『兵士』は神滅具を宿す一誠。それも二天龍の一、赤龍帝なのである。レイヴェルからしてみれば齒噛みしたくなるような状況の変化だろう。

しかしレイヴェルが表情を崩すことはない。あくまでも自分たちが有利であることを雰囲気には滲ませながら口を開く。

「なるほど。保護者に見守られていたというわけですか。それでその余裕「んなわけねえじゃん！」……はい？」

レイヴェルの言葉を遮ったのは秀だった。見れば自分たちライザー眷属たちに背を向けて、一誠と祐斗に指を突き付けている。

「なんで出てくんだよテメエら！ 空気読めよな！」

「テ、テメエらって酷くねえか秀？ 俺ら先輩だぞ？ いや、木場のほ

うはどうでもいいけどよ、俺のことはせめて先輩って呼べよ」

「なんで僕のほうはどうでもいいんだい？」

「イケメンだからだよ、このイケメンさまがよ！ 秀、こいつを貶すことは俺が許す。むしろどんどん貶せ。でも俺には先輩呼びな」

「うっせーんだよ！ いいからどっか行けや！」

目を白黒させるレイヴェルたちを余所に喧嘩は続く。

「いや、どっか行けて言われてもね？ 僕らの増援なんかいらなくてことかい？ 一対七だとさすがに秀君でも厳しいと思うんだけど」

「んなことわかってんだよ。でもこんな機会そうそう無えんだよ！」

「ゴメン秀君。キミが何を言ってるのか僕には分からないや。説明してくれるかな？」

祐斗は笑みを崩さず秀に尋ねる。それを見た一誠が「出たよ、イケメンオーラ」とか言ってるが。

ちなみに小猫はさつきから蚊帳の外。言い争いをしているグレモリー眷属男性陣に手を出さず、静かに待っていてくれるレイヴェル達にペこりと頭を下げていた。

「チツ。ホントこれだからイケメンって奴は困るぜ。イツセー君ならわかるよな?」

「いやだから先輩って呼べよ。小猫ちゃんにならともかく、お前にイツセー君なんて呼ばれても嬉しくもなんともねえんだよ。つつか実は俺もなんで秀がキレてんのかよく分かってないんだけど」

それを聞いた秀は肩を落としてハァーと溜息。やれやれとでも言いたげに頭を振っている。

「あのな、ユート君にイツセー君。あんた等が出てくる前の俺の状況を思い出してみてくれよ」

「いやだから先輩って……、もういいや。で? 俺らが出てくる前の状況だっけ?」

「囲まれてたよね。ライザー眷属の悪魔たちに」
「そう! それだよ!」

秀はビシリと祐斗を指さすと、その指をそのままレイヴェルたちに向けた。

「七人もの美女美少女に俺は囲まれてたんだよ!」
「……ん?」

困ったように首を傾げたのは祐斗だ。一方で一誠は何か気づいたのかワナワナと震えだしていた。

「七人の! 美女が! 美少女が! 俺を! 取り囲んでいたんだよ!」

「いや、それは君を倒そうとしたからで——」

「関係ねえし! 俺の脳内じゃよう、楽園が展開されてたんだよ。俺(の命)を欲しがる美女の群れ! (押し)倒そうと迫ってくる美少女達! 分かるだろ!」

首を傾げたまま停止する祐斗。困り顔でもなお爽やかなその顔に

うつすらと浮かぶモノは、果たして冷や汗の類だろうか。

一誠はといえば何やら「負けた」と呟いていた。

「たしかにそうだ。七人の女の子に囲まれるなんて機会、そうそうあるもんじゃない。しかも女の子全員が可愛いと来てるなんて。だっていうのに俺は、秀が危ないとか、それしか思えなかった。男失格じゃねえか。秀、お前すげえよ」

分かってくれたか。そんな顔で秀は頷いていた。小猫はお星さまキレーと空を見ていた。

「いや、秀君？ 一誠君？ 彼女たちは敵なんだよ？ 欲しがっているのは秀君の命で——」

「つまりは俺の命とつたらーってことだろ。タマを女の子に狙われる。アリだよな、イツセー君」

「そりやもちろんアリだろ、秀。むしろソレがアリじゃなかったら何がアリなんだって話だよ」

「ええー？ で、でもほら、彼女たち、剣とか持つてるじゃないか。敵意満々だし」

「そりやあれだ。私以外の女なんか見ないでよって感じで」

「なるほど。火を纏ってる子なんかのあれは嫉妬の炎か。秀、お前天才じゃね？」

戦闘態勢に入っているライザー眷属をそちのけに議論を始めるバカ二人。小猫はアレがカシオペア座なんですとレイヴェルに教えていた。

「いや、あの、……もうどうしよう。あ、そうだ！ あの子たちはライザー・フェニックスのハーレムメンバーだそうじゃないか！ 一誠君もあんなに怒ってたんだから覚えているだろう！」

「はっ！ そうだった！ つまりはあいつら既に彼氏が居るつてのに秀を弄んだつてことか！ くそつ、俺の後輩になんてことを！」

実際には一瞬たりとも弄んでなどいないのだが。バカ二人が勝手に盛り上がっているだけなのだし。

しかしそんな一誠の憤慨にも秀は動じず、チツチツと指を振った。

「修行が足りねえなあイツセー君。あの子たちは確かにライザーのハーレムメンバーなのかもしれん。だが愛つてのは悲しいかな、不変じゃねえんだ。きつと部長にプロポーズしたライザーに愛想つかしたんだろうな。むしろ心では泣いているのかもしれないねえ。『王』と『駒』の関係は『主』と『下僕』だ。愚痴を吐きたくても『下僕』の身分じゃ吐けやしない。レーティングゲームのあるせいで、哀しみにくられてベッドの中にも許されない。フェニックス家っていう貴族の御曹司の眷属って肩書が邪魔してみつともなくなにかに八つ当たりすることも出来ない。そんな女が目の前にいるってんなら、男ならどうしてやるべきだよ?」

「愚痴も涙も八つ当たりも、黙って全部受け止めてやるのが男ってもんだらうが!」

「その通りだぜ! 分かってくれたかイツセー君!」

「ああ! 魂で理解したぜ秀!」

もうやだこの仲間たち。祐斗はグレモリー眷属になったことを初めて後悔しそうになっていた。小猫はレイヴェルの「人間界の夜空って綺麗なんですわね」という感想に頷いていた。

「俺はなあ、ユート君みてえにツラがいいわけでもねえし、イツセー君みてえに二天龍とかいう主人公オーラ放ってるシロモノ宿してるわけでもねえ。悪魔に転生した時だって、レイナーレに狙われてたのはイツセー君だけで、俺まで殺されたのはぶっちゃけイツセー君のついでみたいな感じだったしな。なんとなく分かってんだよ、俺が舞台の真ん中に立ってスポットライト浴びる日が来ないなんてことはよ。言ってみりやムチャポジよ。どんなに頑張っても主人公にやなれねえのよ。そんな俺に、七人もの女の子に囲まれる瞬間が訪れたんだぜ? 邪魔すんじゃないやねえって思っちゃっても、俺は悪かあねえだろうが」

「ああ……。ああ! その通りだ秀! すまなかった! 悪かったのは俺たちの方だ!」

なんか二人とも泣いてるし。祐斗はドン引きだった。小猫はレイヴェルと一緒にこぐま座を探していた。

「だけど一つだけ言わせてくれ、秀！ お前だつて主人公になれるはずだ！ いつかきつと元気玉が撃てるようになるはずだ！ そのことだけは忘れないでくれ！」

「イツセー君。へへっ、ありがとよ。なんだかイツセー君に言われると信じられるような気がするよ」

拳を突き出し力強く頷く一誠。照れたように一誠の拳に自分の拳を突き合わせる秀。

「そうか。お前の樂園パラダイスを邪魔した俺なんかを信じてくれんのか。ありがとう、秀」

「へへっ。よしてくれよイツセー君。俺たち、仲間じゃねえか」

「秀！」

「イツセー君！」

がしりと二人は抱きしめあう。この部分だけ見れば綺麗な話っぽいのに。祐斗はこの状況に至るまでの経緯を知ってしまった自分の運命を呪っていた。小猫はポケットに入っていたチョコレートチョコレートをレイヴェルたちと分けていた。

「俺を仲間と呼んでくれるか、秀。ならよ、一つお願いを聞いてくれねえかな？」

「なんだよ水臭えな。なんでも言ってくれよ。俺とイツセー君の仲間じゃねえか」

「そうか？ ならお願いなんだけどき、俺も女の子たちに群がられるってのやってみたいから混ぜて「テツメエふぎけんじゃねえぞコラ！」……最後まで言わせるよ！」

「いやマジな話そりゃねえわ。マジでねえよ。つかありえねえし」

「なんでだよ！ いいじゃねえか七人もいるんだからよ！ 半分くらいいいいだろ！」

「テツメ、半分くらいだと!? 女の子は一人として欠けちゃいけない世界の宝物だろうが！ それを3・5人もよこせだと!」

さつきまで心の友とでもいう表現が当てはまりそうだった二人の雰囲気はどこへやら、今は胸倉を掴みあっていた。祐斗は0・5人とするのはどうするのか気になっていた。小猫はレイヴェルの「妹属性

の補完とやらのために眷属に入れられてしましまして」という愚痴を聞き、慰めるように頭を撫でてやっていた。

「だいたいだなあ！ 3. 5人になっちまったら前後左右から攻められるのも0. 5人足りなくなっちまうだろうが！ しかも元は七人だったんだぞ！ 上下前後左右においてもさらに一人自由に配置できるという夢の人数を、半分よこせとかありえねえつつうの！」

「なら0. 5は妥協する！ 三人でいいから！ ってか前後左右は分かるけど上下ってどうすんだよ？」

「上はあれだ、肩車的な。太ももで俺の顔を圧迫してもらう的な」

「くそっ、認めざるを得ない！ お前……やっぱ天才だな。な、なら下は？」

「大ボス的な偉いイケメンつてさ、椅子に座ってるのが普通だよな。そしてその足元にはなぜか美女がいるんだ。こう、足によりかかるようにして、たまに足を撫でてきたりするんだ。しなだれかかるように俺の太ももに顔を乗つけてきたりなんかして、上目使いでこつちを見てこられたりなんかしたりした日にゃ」

「やべえ……。それやべえよ……。たしかに六人は必須だわ。いや、七人いればさらに色んな事が出来るつつたな。上下前後左右に美女がいながら、さらにその時の気分に応じて自由に動かせられる美女が一人。完璧な布陣だ。一分の隙もねえ」

七人の女性に襲い掛かられるシチュエーションについて話していたはずが、何故か椅子に座る自分に待る女性の配置の仕方議論になっているが、そのことに違和感を持つ者はいなかった。祐斗はバカ二人を制裁するため肉体的ダメージを作らず痛みだけを与えるような魔剣を作れないかと試行錯誤していたし、小猫はライザーの眷属たちのライザーに関する愚痴で盛り上がっていた。

「分かったか、イツセー君。七人いる女の子から半分寄越せと言ったアンタの発言がいかにも愚かだったかを」

「ああ。すまなかった、秀。俺がお前ならぶっ飛ばしてでも拒否していただろうよ。俺が馬鹿だった。頼む、ぶん殴ってくれ」

「そんなことしねえよ。イツセー君は分かってくれたじゃねえか。分

かり合えたダチ公をわざわざ殴る必要なんざ、どこにもねえだろ？」
「いや、それじゃ俺の気がすまねえんだ。ダチのロマンを理解しようともせず、バカな欲望を曝け出しちまった。俺なんか殴られて当然、いや、殴られるべきなんだ！」

「バカヤロウツ！」

秀は一誠を殴った。そりやもう全力でぶん殴った。もう忘れられてるかもしれないが、秀は『戦車』の駒によって転生した悪魔である。その膂力は並外れたものであり、結果、一誠は紙切れの様に吹き飛ばす羽目になった。『赤龍帝の籠手』が発動していたのなら仰け反るくらいで済んだかもしれないが、秀と一誠が盛り上がり始めたあたりでドライブグが引き籠ってしまったのだから、まあ結果は推して知るべし。仲間がぶっ飛ばされた祐斗はといえば何故かガッツポーズ、小猫はどこから持ってきたのかバレーボールでレイヴェル達と遊んでいた。

「俺のロマンを認めてくれたアンタがなんでそんなこと言うんだよ！アンタにもロマンがあるはずだろ！ 部長のおっぱいをライザーから守るんじゃないのかよ！ だったら俺なんか殴られてダメージ喰らってる暇ないだろ！」

「そう、だったな。部長のおっぱいを守るためには、確かにこんなところで殴られてる暇なんかないか。効いたぜ、お前の言葉。頭ん中ぐわんぐわんしてやがるぜ」

いや、既に殴ってるから。頭がぐわんぐわんしてるのは物理的に顎にいいのが入ったせいだから。しかしそうツツコミを入れてくれる奴はいない。祐斗はなんか壊れてるし、小猫はレイヴェルのフェニックスアタックをテイルレシーブで受けることに夢中だ。

「行って来るぜ、兄弟。俺のロマンを守るために」

「行って来いよ、兄弟。俺もロマンを手に入れてみせるからよ」

ふらつく足で地面を噛みしめ、一誠は立ち上がる。無理矢理ドライブグを呼び起こし、『赤龍帝の籠手』を腕に纏って。

一誠が立ち上がるのを見届けるとともに秀は一誠から背を向ける。戦うことを決めた男の背中に投げかけるには、最早励ましの一言ですら無粋なのだから。

一誠は駆け出す。愛する人のもとへと。きっと彼女は今も戦っているはずだから。彼女のために戦うために、『赤龍帝の籠手』は自分に宿っているのだから。

秀は星に向かって拳を突き上げる。朋友の勝利を、自分だけは絶対に疑わないと誓うかのように。

そして、その瞬間、

『リアス・グレモリー様、戦闘不能。ライザー・フェニックス様の勝利です』

何かが崩れる音が聞こえた。

ワンピースネタ

夜。それは人間にとって恐れるべき時間帯である。

未だ人間の生活圏が安定しなかった時代においては、夜行性の獣たちは恐怖の対象だったであろう。街灯が並び獣による被害が消えて幾久しく経った現在においても、人目を避けるならず者たちが活動を開始する夜間は、そう人々が軽々しく出歩けるものではないままで。

ではその認識は海上においてはどうか？ 様々な想像がされるのだが、実際の所、夜が恐怖される時間であるというのは海の上であつても変わらない。

意外と思う者もいるだろう。世はまさしく大海賊時代。ゴールド・ロジャーの処刑からこちら、航海に乗り出す若者は後を絶たず、海にて名を上げる海賊の数も増えるばかり。海はならず者の住処であり、夜こそが彼らの本領と捉えられているのかもしれない。

しかしそれは間違いである。視界を遮る夜の暗闇は、容易く岩礁や暗礁を船員の目から隠してしまう。船やクルーにどれほどの信頼を置いていたとしても、海難事故を避けるためならば夜間の航海は慎むべきであろう。

また、大海賊時代と称される時勢も問題だ。広大な海とはいえ他船との出会いが皆無というわけではない。海賊と海軍が出会えばもちろんのこと、海賊同士の出会いであつたとしても戦闘に突入することは少なくないのだ。

夜間の戦闘。視界が限定されたそれは混乱を発生させ、時に同士討ちを引き起こす。クルーを無闇に失う羽目になりかねない。

結論、夜とは自由の象徴ともされる海賊であつたとしても、不自由を強いられる時間であるといえるだろう。

そんな、月も中天に輝く夜間のことである。場所は世界の中心を走る偉大なる航路、グランドライン。その海の上で戦闘の音が鳴り響いていた。

音の出所はあるガレオン船。ドクロのマークを帆に掲げた海賊船である。

怒号が轟く。悲鳴が響く。鉄を打ち合う剣戟の音、火薬の爆ぜる炸裂音。裂帛の気合いが、断末魔の絶叫が、暗い夜空に鳴り響いていた。「チクシヨウ、ふざけた真似を！」

そう悪態をついたのは巨漢の男。懸賞金額七千六百万ベリーの賞金首でもあるガジアスが傷ついた部下を背後に庇い、巨大な西洋剣を油断なく構えていた。

「ふざけた真似、ねえ？　こんなもの、ただの掃除だろ？　海のクズども」

対峙するのは黒のスーツに海軍のコートを羽織る、未だ少年と違っていいような年齢の男。倒れ伏した海賊たちの中心で、雨も降っていないというのに真つ赤な傘を差していた。

しかしその赤は染められたものではない。青年が傘を畳みクルリと軽く振るえば、傘から甲板へと赤が飛んだ。

「血の雨降らせて己は濡れず。やっぱりふざけた真似だなあ、『血傘』のグノー。たしか階級は海軍本部の中佐だったか？」

「へえ？　俺の名前まで知ってるとは、クズにしては中々に博識じゃないか。ただし中佐じゃなく大佐だ。つい先日昇進したんでな」

「そいつはめでてえな。祝いにさらに二階級特進させてやるよッ！」

気合と共に一閃。ガジアスの持つ大剣が奔るが、

「億にも届かねえクズの首じゃあ、特進どころか昇進すら無理だわなあ」

小馬鹿にしたように笑うグノーの傘に阻まれた。

二度、三度と剣と傘がぶつかり合う。月明かりを受けた剣が銀色の線をつくり、闇色の傘とぶつかりあうたびに火花を散らせていた。

押しているのはガジアスだった。両手で振り回す身の丈ほどもありそうな大剣と、見るからに軽そうな傘。ぶつかり合えば当然大剣が押し勝ち、傘で受けるグノーは時に体勢を崩すこともあるほど。

しかし決め手にはならない。その武器の重量からガジアスの手数はどうしても少なくなる。グノーの体勢を崩し隙を作ったとしても、

その隙につけ込むための次の一撃が間に合わないのだ。

故にガジアスは次の一手へと移る。

「ウ、オオオオオオオオオオオ！」

大剣を振り回していた子供の胴体ほどもある両腕がさらに膨張する。メキリ、ビキリと音を立てて筋肉が肥大化していくとともに、次第に金色の体毛がガジアスの全身を覆い出した。

「動物系か？」

ブシユーと荒い鼻息を吐き出したガジアスに対しグノーは問いかけた。ただでさえ膂力の差で押し込まれていた相手が身の丈三メートルを超える巨大さになったというのに、焦るところかどこか楽しいな声色を響かせて。

「おう！ ウシウシの実・モデル『ラクダ』を食ったラクダ人間だ！ パワーとスタミナにかけちや動物系でも随一よ！」

ガジアスの繰り出す大剣の速度が増す。それまでは大剣の重量とそれによって生まれる遠心力で叩きつけられていたのが、今ではまるで小枝を振り回すかのように自由自在に振り回されている。

「西ウエストトルの海で磨いた俺様の剣は、グランドラインで悪魔の実に出会ったことで最強の剛剣になった！ 俺はこの剣技で『鷹の目』越えを果たすのさ！ 海軍の大佐風情にかかずらわってる暇はねえ！」

巨大な西洋剣から繰り出される剣技は最早暴風も同然だった。その速度は、大剣とは比較にならないほど軽いはずの傘を操るグノーを凌駕し、そしてついに、

「おあ？」

一閃。傘による防御をすり抜けて、ガジアスの大剣がグノーの上半身と下半身を分断した。

「バツハツハツハツハ！」

ゴトリと音を立てて崩れ落ちたグノーの上半身にガジアスの笑い声が降り注いだ。

ガジアスとしては勝利の余韻に浸りたいところでもあるのだろう。しかしガジアスは一剣士である前に船長でもあった。グノーによって殺されたクルーたちにどうしても意識を持っていかれる。

「チクショウ！ クソガキめ、好き放題暴れやがって！ テメエら、大砲の準備をしろ！ コイツラへの手向けだ！ 海軍の船を火だるまにして——」

しかし、ガジアスの言葉はそこで止まる。見れば金の体毛で覆われたガジアスの首に手のようなものが掴みかかっていた。

「いい腕だ。まさか真つ二つにされるとは思わなかったよ。だが、俺ごときを殺しきれないようじゃ『鷹の目』越えなんざ無理だなあ」

真つ二つにされたままのグノーが倒れ伏したまま心底おかしそうにそう笑っていた。そしてグノーが笑うごとに、切断面がだんだんと霧へと変化し、立ったままだった下半身へと移動していつていた。

「テ、テメエも、悪魔の、実、の、まさか、自然……」

首を絞めつけられながらもガジアスが唸る。やがてグノーはガジアスの首を掴んでいる左腕が無い以外元通りとなっていた。

「前半は正解だ。俺もまた、悪魔の実の能力者。しかし後半は不正解。俺の食ったのは動物系ゾオンの実だよ」

そこでグノーはおもむろに頬を拭った。先ほど倒れ伏した時に付いたのだろう、甲板を染め上げた海賊たちの血液が指を赤く汚していた。

一瞬それを見つめたグノーだったが、次の瞬間指に付いた血を舐め上げた。レロリ、そんな音が声を失っていた海賊たちの耳に響く。

「俺が食ったのはヒトヒトの実。動物系ゾオン悪魔の実、ヒトヒトの実・幻獣種・モデル『ヴァンパイア』。つまりは吸血鬼って奴さ」

グノーは落としていた傘を拾い上げる。昼間においては日光を遮り、戦闘においては戦艦の主砲を受けても穴ひとつ開かないとされるDr・ベガパンク製の傘を。

「ま、今さら知ったところでどうしようもないんだけどな。貴様らクズは、このアルカード・グノーへの恐怖だけを憶えて死んでいけ」

グノーが傘を構える。そして、

「指銃・槍破」

一撃。ただの一撃で全ては決まった。

傘がまるで槍のように突き出され、それがガジアスの胸を中心に穴

をあけた。鍛え抜かれた海賊の胸筋も、悪魔の実によって得られた野生の鎧も、なすすべもなく貫かれていた。

涙交じりに船長の名を呼ぶ海賊たちの声をしり目に、グノーはガジアスを放り捨てる。

「さて、残りのゴミ掃除もやってしまおうか。ああ、めんどくせえ」

そして、再びの蹂躪が始まった。



海賊たちの討伐を終え、カンテラによる合図を仲間である海軍の軍艦へと送りながら、俺ことアルカード・グノーは内心溜息をついていた。

（こ、今回も生き残れてよかったー。ってか百人以上いなかったか？ しかも船長は悪魔の実の能力者だったし。いくら俺の能力が夜戦特化だからって一人で突っ込ませられるような戦場じゃねえだろ。さすがに死ぬかと思った。なんかあいつの剣が十字架っぽかったせいか動きにくかったし）

思い返せば最近こんなことばかりの気がする。

そりや夜戦ってのは非常にハイリスクな戦いだ。目測しにくいから砲撃戦はしにくいし、同士討ちだって頻繁に起こる。船ぶち当てて総員戦闘なんて狂気の沙汰だ。だからどうしても夜に戦闘に入るってんなら俺みたいなのを少数投入するってのは正しいんだらうけど。（だからって単騎突撃はねえよなあ。もしかして体のいい捨て駒扱いされてたりすんのか？）

思えば悪魔の実を食べてから全部がおかしくなったような気がする。

俺は元々孤児だった。今の時代、それはそう珍しいことでもない。なにせ大海賊時代なんて渾名されるようなイカレた時代だ。海賊の襲撃で破壊された村なんて山ほどあるし、俺みたいに海賊に家族を殺されたガキだって腐るほどいる。

そんな孤児の中じゃ俺はまだマシな方だった。路頭に迷うこと

なく世界政府の直轄機関に拾われたのだから。

俺はそこで訓練を受けていた。世界政府直属の諜報機関、サイファーポール。その構成員育成所でだ。

自分で言うのもなんだが努力はした方だし才能もあったと思う。サイファーポールのメンバーでも一握りの者しか会得できないとされる超人的体術『六式』もマスター出来たのだし。同年代でマトモに俺と張り合えたのなんて同期のロブ・ルツチくらいなもんだった。

いずれはサイファーポールの中でも幻の九番目に配属か、なあんでルツチと一緒に言われたもんだ。

(だっていうのに海軍だもんなあ。しかも消耗品みたいな扱いされてるし)

道が外れたのはやっぱり悪魔の実を食ってからだだろう。

ある時世界政府が入手した二つの悪魔の実。凶鑑にも載っていないかったそれらは、将来性を見込まれてか俺とルツチの元へ来た。

『悪魔の実の能力者は海に嫌われる』『しかしそのデメリットを打ち消して余りある強さを手に入れる』そう聞かされたから拒否することもなく食べたというのに。

(ロギアより珍しい幻獣種、それだけなら大当たりもいい所だっただろうけどな)

モデル『ヴァンパイア』。並みの動物系を数段越える臂力と、自然系ゾンに匹敵する不死性。しかし同時に『海に嫌われる』以外のデメリットが付いてくる厄ネタでもあった。

それは『ヴァンパイア』の伝承にもある弱点の数々。日光が弱点。ニンニクも弱点。十字架も弱点。拳句の果てには招かれないと他人の家に入れない。

能力を発動していない『人型』の時には大抵の弱点は弱まるんだが、それでも完全に消えてるというわけでもなく、日光を浴びれば火傷したみたいになるわ、ニンニクの匂いには鼻が曲がりそうになるわで。(招かれないと家に入れないのなんて諜報員としては最悪だもんなあ。そりゃCPにもお断りされるわ)

一緒に悪魔の実を食ったルツチの方はネコネコの実モデル『レオパ

ルド』だったか。肉食系の動物系とは『六式使い』として最高の目を引いたようなものだ。今頃出世街道を邁進していることだろう。羨ましい。

と、いろいろ考えてる間に海軍の軍艦の接舷が完了したようだ。続々と海兵が乗り込んできた。

そして、俺を海賊船へと突っ込ませた上司も。

「いや〜ご苦労さん。やっぱり夜戦はグノー君の独壇場だねえ〜。今回はキミ一人にまかせつきりにするにはキツイかとも思ってたんだけどねえ」

そう思ってたんなら一人で行かせんなよ！　なんて絶対に声には出せない。

「はっ。恐縮です。ボルサリーノ中将」

というのもこの上司、ボルサリーノ中将は俺の天敵だからだ。

ボルサリーノ中将。『黄猿』の異名で知られるこの中将はピカピカの実を食べた光人間。太陽光を弱点とするヴァンパイアにとっては天敵もいい所。近くでピカツとされるだけで勝手にダメージを喰らう俺だったりする。

そんな天敵の部下に押し込まれてる辺り、海軍が俺のことをどう思ってるかは察せるというものだ。

（俺、なんか悪いことしたかなあ。CPには就職前にお断りされたんで世界政府の機密とか持つてるわけでもないし、口封じってことはないだろ？　一般市民や仲間の海兵から吸血したこともないし。献血用の輸血パックとかはたまに貰ってるけど、無断で拝借してるわけじゃないもんなあ）

だというのにこの扱い。やはり吸血鬼のイメージが悪すぎるのだろうか？

「相変わらず硬いね〜。ま、世界政府のお役人志望だったんだし、しょうがないのかもしれないけどねえ〜」

役人。まあ表向きは役人、……か？　諜報機関の諜報員って。あれってなんなんだろ？　公務員？

「それにしても殺しも殺したりだねえ。息のあるのが何人いるかねえ

」

「はっ。生け捕りが望ましかったでしょうか？」

「いやいやあく。上が公開処刑をしたがってるなんて噂もあるけどねえ。小粒な海賊だったしねえ、どうせ生け捕りにした所でインペルダウンにぶち込んで終わりでしょ。わっしは殺しちまってもなんの文句も言われんと思うよあく」

そんな噂あんのかよ。俺聞いたことないんだけど。

……別に噂話するような友達がいなくてかじやないし！ CP 関係者なら仲良い奴だっているし！

「ところでグノー君、『お食事』は済んだのかねえ？」

「はっ。いいえ、『食事』はしておりません」

「そうかい？ そんなじゃまあ、ちやちやと済ませてしまうといいよあく。わっしらは息のあるのを連れて船に戻つとくかんねえ」

そう言う中將は海兵とともに軍艦へと戻って行った。

『食事』言うまでもなく『吸血鬼としての食事』である。つまり中將は殺した海賊たちの血液で好きなだけ腹を満たせと言ってくれたわけだ。

もしかしたらそれは厚意によるものなのかもしれない。ありがたいことなのかもしれない。だが、

(ああヤダヤダ。飲みたくねえなあ)

この場合は有難迷惑という奴だ。

なにせ血を吸っていいと言われた相手は海賊である。海賊と聞いてどんな人種を想像するか。『乱暴者』だとか『肉ばかり食ってそう』だとか『ひたすら酒飲んでそう』とかだろう。少なくとも『清潔そう』だなんてイメージは絶対にはずだ。

(風呂なんかとは無縁の海賊共に牙を突き立てるくらいなら飢えた方がマシなんだけどなあ。『傘』があつてホント良かった。マリンフードに帰ったらバガパンクにお土産持ってたかなきゃ)

もっていた傘の取っ手を外す。こいつは芯の部分を空洞にしてもらっているため、こうすれば鉄製ストローに早変わりという寸法だ。

(それでも野菜とか食わねえ奴の血ってドロドロしてるから飲みたく

ねえんだけど。腹を空かせてるとただでさえ俺にビビってる海兵の怯えが酷くなるしなあ。ハア、ホント嫌だなあ)

傘を海賊の死体へと突き刺し、『食事』を開始した。やっぱクソマジイなあなんて考えながら。



海軍本部中將であるボルサリーノは自身の軍艦に戻るとともに、海兵たちに気づかれぬよう小さくため息をついた。

(はあく。やっぱり怖い子だねえ)

あれだけの血の海を作り出しといて眉一つうごかさないと。海兵の中には軍艦に戻るなり胃の中身を吐き出している者までいるというのに。

末恐ろしいものだ。そう素直に思う。CP9最強の殺し屋、ロブ・ルッチと同等の評価を与えられていたというのは伊達ではなかったということか。

(食べた悪魔の実の能力の特殊性に目を付けたセンゴク大將がサイファーポールから引っ張ってきたって話だけどさあく。まあ海賊どもに対する『抑止力』としては確かに優秀なんだろうけどねえ)

難儀な話だ。そうボルサリーノは思った。

ボルサリーノはグノーを、海賊がその名を聞くだけで恐怖するような海兵に育て上げるとセンゴクからは指令を受けていた。それゆえの単騎による突撃命令の繰り返し。戦果は派手に喧伝されることになるだろう。『血傘』などという海兵にあるまじき二つ名がグノーについたのも、智将センゴクの策の一つか。

期待されている、とそういうことなのだろう。それがグノーにとって良いことなのかどうなのかはわからないが。

グノーがボルサリーノに預けられているのも期待の表れの一つなのだろう。サカズキの『徹底的な正義』やクザンの『だらけきった正義』に影響されない様にとの配慮もあるのかもしれないが。

(わっしの所なんかよりサウロの所にも預けた方が良さそうな気も

……って、サウロはオハラの学者の逃亡助けて逃げてるんだっけねえ〜

と、ボルサリーノがそこまで考えたところでタンツと音が鳴った。月歩で軍艦まで戻ってきたのだろう、グノーがそこにいた。

「ただいま戻りました、ボルサリーノ中将。ご配慮いただき有難うございます」

「いいよう〜。んじやまあ、あの船、沈めちまうよう指示出しといてねえ〜。任務の途中だから曳航するわけにもいかんしねえ〜」

「はっ。了解いたしました」

敬礼を終えるとキビキビとグノーは海兵たちに指示を出し始めた。そこだけ見れば有能な海軍士官だというのに、周囲に漂わせている血の匂いのせいでむしろ危うさを感じてしまう。

（任務が終わったらセンゴクさんとちよいと話してみるべきだろうねえ。もう大佐なんだし、自分の部隊を持たせても早すぎってことはないだろうし。むしろ遅すぎなくらいかねえ？ あの子の出世スピードが速すぎるだけなんだけどねえ〜）

そこでボルサリーノは一旦思考を区切る。なにせこれからカームベルトの帯だ。いくら海軍の軍艦がカームベルトを比較的安全に通過できるとはいえ、海王類への警戒は必要だろう。

そしてカームベルトを越えれば西の海。サイファールが先行しているオハラに向かい、おそらく発動することになるであろうバスターコールに参加しなくてはならない。

（アレもやれ、コレもやれって難儀な話だよねえ〜。目の前の海賊だけ倒してりやよかつた下っ端の頃が懐かしいよう〜）

理解しにくい部下の教育やらバスターコールやら。クザンほどとは言わないが、少しは怠けても許されるんじゃないかと、そんなことを考えながらボルサリーノは大砲の砲撃で燃え上がる海賊船を眺めていた。